

昭和七年一月一日

昭和七年壬申の第一日目を迎ふ。各人新春の気を新たに、本日より来る年の活躍を期すべく、残留生九名八時一緒に雑煮にて新年を祝ふ。十時学校の式に参列し先輩其の他の年始廻りをする。午後桜林君一人藻岩登山す。本日晴天にて雪の気配なけれどスキーなしにて行けるなり。他生は雑談に過す。夜カルタ取り、トランプ等をなして新年の快樂を味ふ。本日文芸部引継ぎを行う。

一月二日 本日初荷の故か、早朝より街頭騒然たり。午後大部分の者は俗界の景気なるものを見物に出掛ける。永井君半年振りに床屋に出掛け裾がりをして来る。たちまち変るシックな頭髪、セールシェーンなり。

夜三号に集りてレコードを鑑賞す。

一月三日 本日夜、故坪田進太郎君遭難第二週年追悼会を催す。九名の舎生だけなりしが、広瀬君當時を追懐しお話す。本日午前坪田君御両親に電報を打ち、その返電あり。「故進太郎の遭難二週年に当り御厚電を謝す、諸君の御自重を祈る」と。会后、先輩寺岡義郎君御送附のカステラを戴き十一時頃散会。久し振りにて白雪片々と下りて下界を浄化し、スキーヤーに喜びをもたらすと思ひきや、雨混りにて悲観す。寺岡君に寄せ書きをする。我軍錦州城に入る。

一月四日 午前坪田君母上よりチョコレート御送り下さる。常ならば我が子に送らんはずのものを、心ぞ如何に悲しかるらん、謹みて戴く。二ヶ月振りでストーブ掃除する室多し。本日は軍人勅諭渙発五十年記念日なり。午後桜林、山根、増井、若松の四君藻岩に出掛ける。今年最初の所謂初滑り、大いに転ぶ。永井君小樽の親類へノビに行き外泊、夜東郷元帥の放送あり、これ元帥のマイクロフォン前に立ちし初めてのものにして最後のものならん。「軍人に賜った勅諭の五十年に際してのお話」なり。

一月五日 今日もよい天気なり。昨夜五分ほど積りし雪もたちまちとける。桜林君午前外出し夕食時によろ　帰る。午後山根、増井、若松の三名ジルバー方面へ、秋葉君三角山方面へスキーに出掛く。雪少く面白からず。広瀬君、藤田一君教会へ御葬式に行かる。舎内いと静かなり。永井君本日帰らず。

一月六日 天気良好、消防の出初式か、早朝より鐘の音聞ゆ。午後桜林、金森両君は藻岩へ、藤田、若松の二君は天稻附近へそれぞれスキーに行く。他の者は家にくすぶる。

永井君本日も帰らず。本間君夜八時帰舎さる。そろ　皆帰り来るべし。

一月七日 早朝天辰干城君勇ましく帰舎す。

本日曇天、少々雨降る、彼氏の心の如し、全舎生終日舎内にくすぶる。本間君に大きな柿の饗應を受けたり。永井君やうやう夜遅く帰舎す。

一月八日 八時の汽車で畑君帰舎す。本日よりいよ　学校始まる。予科生及水産マンはコンデを聞きに学校へ、又本科マンも学問始めに学校へ行く。本日寒気感ぜられ、小雪あり。夜迄には二寸ばかりの積雪を見たり。スキーヤーの大なる喜び、かてゝ加へて明日は土曜なり。

本日押入号外の如き天下の不祥事突発せり。

即ち陸軍始めに観兵式行幸より還御の天皇陛下後鹵簿に爆弾を桜田門外に於て投付けたる者あり。幸にそれは宮内大臣の乗用馬車にあたりしが不発に終りたるものなり。犯人は直ちに捕へられ、鮮人李奉昌（三十二）なる者なりと、こゝに於て犬養内閣は責を負ひ辞表奉呈、直ちに總辞職せり。

未だ一ヶ月足らずして犬養内閣終る？先年山本権兵内閣に於ける虎の門事件の如き、又今回の如き実に日本国民としてかゝる同胞のあることを悲しまざるを得ない。殊に今回の如きは、天皇陛下に対して行われそのものにして古今東西未曾有の不祥事と云わねばならぬ。日本には未だ蛮風と称すべき暗殺なるものあり、前年の浜口氏の如き、内閣總理大臣にしてかゝる目に会はれるもの無きと称せらる程かゝる不祥事が行はる。而して天皇陛下に対して為さるゝは今回始めとなさん。日本国民たる者よく謹んで自重せざるべからず。

先輩中島頭三氏、本日任地静岡県清水へ出発せらる、八時舎生有志御見送りする。

氏は長く大学にて研究されておったのであるが、研究完成し札幌を去られたものなり。

一月九日 昨日より雪の訪れあり約五寸、春の原又たちまち冬の白銀野に化す。スキーヤーの喜びこれにすぐるはなし。即ち広瀬、桜林、金森の三君は藻岩、山根、藤田一、永井、若松の四君はゲレンデ廻り、増井、秋葉の二君は進藤牧場へそれぞれ心を伸ぶ。朝八時樋口君元気で帰舎す。

新聞によれば犬飼内閣御優定により留任すと、而して警視總監及び内相の責はまぬかれ難き様なり。

一月十日 午前八時大岩君帰舎す。本日は日曜にして、昨日の久方振りの雪なれば桜林、広瀬、山根、増井、若松の五君手稲登山す。新人大いにへばりしも無事帰る。畑、藤田一、秋葉の三君は円山へ出かけし由、夜大島君、加藤君帰舎さる。

一月十一日 畑君風邪の為め臥床す。外に風邪気味の人二、三人あり。昨年の轍をふまぬよう注意せられたし。タイムスタ刊の傳ふる所によれば、我室師団に属する一連隊が約五千の兵匪に錦西に於て囲まれ、連隊旗を奪われ、隊長他（三、四十名なりと）全滅すと、戦いよ 拡大すべし。軍旗は無事なること後に判明す。

一月十二日 雨しきりに降りて雪ほとんど解く、残念なり。畑君ほとんど全快す。藤田一君代りに臥すようになる。戒心すべし。

本日副舎長より左の発表あり。

来る十六日（土曜日）午後六時半より宮部先生宅に於て月次会を兼ね懇親会を開きます。

委員（先輩に通知）左の如し

金森、若松、増井の三君

一月十三日 本日夜、石君、藤田康君同時に帰舎さる。「櫓の音」原稿募集す。風邪にかゝりたる人も殆んど全快したらしい。

一月十六日 今シーズン中最も寒し。本日先輝あるスキー史を綴って第五回インターカレ

ッジスキー大会の幕は切って下さる。札幌神社外苑宮の森スキー場を会場としたるこの大会は、絶好の天気と土曜に幸され、大観衆は雪崩を打ってつめかけたりと、本日は耐久（五十軒）、長距離（十八キロメートル複合を含む）の両競技行わる。この大会に北大は断然勝味を有し、本日の成績左の如し。

尚参加校は早、明、法、立、日、日歯、小樽高商、北大及び番外弘高、山高の十チーム、選手九十余名なりと。

十八軒決勝（複合）北大十二点、明大七点、樽商二点、早大一点

1、宮村六郎（北大）一時間四十七分十三秒

2、奥井由雄（北大）一時間五十三分四十五秒

以下略。

五十軒は末祥、明日記せん。

本日午後六時半より例年の宮部先生の御招待に依り、舎生一同参上し、色々御馳走、遊戯にふけり十一時半辞したり。先生も我々に混って小供の如く嬉々として一緒に遊び下され、大変愉快なりき、並びに出席されし先輩は亀井氏、時田氏、多勢氏、平戸氏の四氏なり。舎生増井君は風邪のため欠席さる。用心ありたし。

一月十七日 本日早朝畑君トイシ山へ、大島桜林の両君は遥山へ出掛く。

インターカレッジスキー大会第二日目、ジャンプ、三十二軒リレー行わる。ついに北大は左の如き結果にて優勝、二年連敗を雪辱す。こゝに於て北大は第一、第二、第五回の三回に優勝せることとなる。成績左の如し

五十軒（第一日目）早大十一點、北大七點、明大三點、法政一点

複合決勝 北大十五點、小樽高商六點、法政一点

ジャンプ 北大十二點、早大七點、法政三點

リレー 早大七點、北大五點、明大四點、法政三點、高商二點、早大一点

總点、北大五十一點、早大二十六點、明大十四點、高商十點、法政八點、日大一点、日歯〇、立大〇

かくて榮ある秩父の宮賜杯北大の手に渡る。

一月十八日 藤田君も風邪の気味にて臥床す。

増井君ほゞ全快近けれど、いまだ床をはらふに至らず。夜舎内静かなり。

一月十九日 藤田、増井両氏未だ就床、而して殆んど全快到近し、大島君幾分疲れ気味と風邪のため元気なし。本日のしんぶんの傳ふる所に依れば、先日来行榮不明を傳へられおりし松尾輜重兵部隊二十七名、錦西たる古賀連帯（全滅せる）へ兵糧運搬の帰途、全部兵匪のため戦死せること判明せりと。

皇軍かく方々で全滅を傳へらるは誠に悲しむべきことなり。

一月二十日 増井本日床を離る。而して藤田君本日ヘントウ腺がはれて発熱あり氷まくらをするに至る。早く全快到望む。本日女流作家三宅やす子突然死去せる由新聞に現はる。吾界大思想全集第六十回配本あり。

近時予科三年英語学級にては協定が行なわれているらしい。仄聞する所によれば、大岩君は理科の化学、石君は農芸化学、大島君は工科機械、山根君は電気なりと。

一月二十一日 藤田君未だ就床、増井君又気分悪しと就床す。夜に入りて雨降る、この変調はどうしたことか。本日は休会明けの議会開く、直ぐに解散さる。總選挙日は二月二十日の由、いよ 吾の中騒しくなる。

樋口君オーバーを新調す、本科マンになる日や近し。

一月二十二日 広瀬君午後弁当持ってスキーコースを作りに出掛けて外泊、夜桜林、大岩両君音楽の練習。

一月二十三日 藤田君病院へ行く。大変経過良好らしい。夕方広瀬君帰らる。本日全道スキー選手権大会挙行。耐久レースで安村、十八軒で黒田、共に北大一位を占む、北大今年は意気すこぶる高し。夜殆んど外出、而し明日山へ出掛ける人のみ、その準備に忙し。

一月二十四日 早朝、大島君藻岩山、桜林君無意根、広瀬君札幌岳、山根、若松の両君砥石山へ各々出掛け元気で帰る。本日天気良好、山党断然おさへることならん。

藤田一君床をはらう、これで舎内の風邪のの神退散す。

一月二十五日 本日決算を行ふ。一日五十五銭也、お正月としては割合安し。

一月二十六日 夜吉川君遊びに来る。三号室で駄弁って帰る。樋口君の誕生日のお祝のお菓子ありて賑はし、但し誕生日は昨日なりし、十一号室にても集まりてだべるらしく訪声聞ゆ。

一月二十七日 本日雪降る。何と珍らしい ことだと言われるようになったのだから実際不思議、又冬になったような感じだ。冬は冬だが近頃よく室に集って駄べる。

一月二十八日 もう見られないかと思った雪が朝二寸程積っていた。晝から桜林君藻岩に出掛く。

一月二十九日 本日も時々花の散るように雪が散った、一片二片と。

先日来不穩の氣満ちていた上海でついに日支衝突す。ハルピンにも不穩の形勢見ゆとのことなり。

一月三十日 終日雪降る。然して大雪に非ず、夜に入りて吹雪となる。土曜日のこととて桜林、藤田一、若松の三君藻岩へ、天辰、秋葉の両君盤溪より幌見の方面へ行く。

秋葉君大いにへばりて帰る。

本日午後六時より恒例舎内ピンポン大会行わる。個人試合と東西対抗試合なり。而して個人試合に於て畑君優勝、二番桜林君。三番広瀬君の順序、東西対抗は東方の勝ちなり。左の如き成績なり（略）。終了後

一月三十一日 雲一つない晴天なり。桜林、大島、山根、増井の諸君遥山へ出掛く。新雪を踏んで顔を黒く焼いて元気で帰る。大岩、藤田一、秋葉の三君ジルバーへ、広瀬君砥石へ、永井、天辰の二君藻岩へ各々出掛く。石君も藻岩とか、舎生殆んどスキーに行く。畑君のみ弁当持ちて学校へ。上海日支衝突につき英米共同して抗議を申込む、国際連盟

硬化し十五條適用に決す。

二月一日 今年中で一番寒く感じた。夜三号室にてだべる声聞ゆ。

二月二日 本日も寒し。夜桜林、大岩両君音楽練習、夜方々の室に集って茶を飲んでいる。突然谷口軍令部長辞職し、伏見宮殿下軍令部長に御付き遊ばさる。上海問題いよいよ急なり。

二月三日 毎日のように寒さが続く。いよ 厳寒到来？本日より軍縮本会議寿府に於て開かる。初頭、上海日支問題に付きて緊急理事会開催となる由。

二月四日 夜三号室にて一時頃まで雑談す。

副舎長より二月十日月次会を兼ねて送別会開催の発表あり、同時に副舎長、各部委員選挙を行ふ由、委員はおおいわ、樋口、両藤田、天辰の五君なり。本日節分なり。

二月五日 明日スキー登山行なわる故、舎生スキーの手入れに忙しし、月次会委員の第一回相談会ありたり由。夜清水君久し振りに遊びに来る。三号室にてトランプをして遊ぶ。昨日来、本舎の先輩たりし山下太郎君の金融界に於ける発展振りに付いて北海タイムス紙上に掲載される。参考のため切抜く。

二月六日 本日は恒例寄宿舍手稲スキー行なり。朝六時なるに既にたゞき起こされて、ねむい眼をこすりながら而も一本の羊かんと味のぬけたみかんに好意を懐いて朝めしを飲み込む。幸に咽つまりをする人もなく七時二十五分札幌発の小樽行の汽車に意気堂々女学生専用車を占領す。但し誤解するなかれ、その内容物は皆吾人と乗り違いになったなればなり。軽川に付きしはその後十五分後なり、八時十五分前にパラタイスイ目がけて突進す。始め広瀬君先頭を二、三丁程進みしが、その後ヒュッテ迄第一線を受けたまわるのは天辰干城君とこそ思へ。

それに続く雑兵(?) 最行は山行本部、殿は桜林君なり、途中連絡余り宜しからず、天辰君突撃に突撃を重ね、終に十時にヒュッテに着く。新人大いに頑張る。心強し。

それより山頂を極める組とヒュッテ居残り組との二つに分る。山頂征服組は広瀬、桜林、大島、金森、若松、増井の六君なり。

而し居残る人は山頂へ行きし人のためお茶をわかしたり、色々便宜を計るため残りしものとは気の毒千万、山頂組一時帰着す。

真白くなって帰る。但し余り雪のコンディション宜しからず、又少なかりしがスウィングの際、その飛雪が身を包みぢものよ覚えし。一時半下山開始、先頭は又天辰君なり、殿は桜林君なり。道は氷の如きなれば、さすがの頑張り組は、この時こそ雪と仲良くすべき時と考えしか。ある時は顔をこすり合はせ、或る時は尻を深く埋め、或る時は長く横になり異常な親密振りを發揮せり、こゝに特筆大書すべきは大岩君防火線瘤のジャンプなり。その前までの人は大帝そこに於て、より一層雪と親しくなったのであるが、大岩君はスッと片足にて立ち、満場のと云つても二、三人であるが拍手を受けたり。こはルード兄弟でも及ばざる妙技と、又途中の連絡のうまく行かざりしは遺憾なり。然れども三時十分の汽車にて間に合ひ札幌に帰りたり。本日参加者は広瀬、大岩、石、桜林、

大島、樋口、藤田一、金森、藤田康、永井、増井、秋葉、天辰、若松の十四名なり。本日は開学記念日なのである。夜しるこの馳走あり。

本日より※※萬国オリンピック大会序曲冬季競技の幕が切って落された。されど残念、スピードスケート競技、日本選手の惜敗を聞くのみ、今後の活躍を期せん。

全日本スキー選手権大会に北大五十軒に宮村一等、奥井二等、黒田三等を占む。

二月七日 寒し、午前中昨日の疲れにて多くの方は眠りおるがためか静かなり。午後広瀬、桜林両君藻岩に出掛く。月次会委員は先輩訪問に、夜四、五人活動見学に行く。

この寒さに臆せず。新聞に依れば陸軍上海出兵断行の由。

二月八日 本日の寒さは本格的なり。即ち札幌に於て零下十八度本年最寒なり。旭川にて零下三十度の由。夜月次会委員買出しに出掛く。安田君遊びに来て七号にて話す。

全日本スキー大会に北大奥井複合に優勝、宮村五等、ジャンプにて五等伊黒、五等山田入る。

二月九日 依然寒し、午前中雪落ちて大部和らぐ。午後、桜林、大島、藤田一、永井、若松の諸君藻岩に出掛く。熱心の程驚き入る。夜又雪降りて大部彼等の心を乱す。げに恐ろしきは雪の力なり。方々で駄べる。

二月十日 雪三寸程積って喜ばしい。寒さも大分和ぐ。本朝号外にて、前蔵相井上準之助氏は民政党候補駒井重治氏応援演説に出掛けし途中、兇漢小沼正（二十二）なるものに射撃され絶命せり。井上氏の政策に憤激してこの兇行を演ぜしものなりと。

浜口雄幸氏のことあり又かゝる人をその公の立場より狙撃するは甚だ悲しむべきことなり。現代に於ては私的にさへ許されざるもの、まして公の場合に於ておや、国家のため悲しむ。近来自分の目的のため手段を選ばざる傾向を有し、かゝる痛恨事出来するは、けだし議会に於て流血の惨事まで引き起す天下の選良も一半の席をまぬがれぬ。近後かゝるために国政に与るもの。その主義政策を不徹底にするに於ては、国家千年の計謀るべからず、心せよ。

本日金森君送別を兼ねて月次会あり。

午後六時、五人の委員の手に成れる晚餐を先生、犬飼氏、亀井氏、時田氏、多勢氏、平戸氏の五先輩と共においしく戴く。短時間に拘らず手際優秀なり。食後記念撮影をす。七時半より送別月次会催さる。先輩今井氏この時お出になる。順序左の如し。

- 一、開会の辞
- 二、副舎長挨拶
- 三、舎生送別之辞
- 四、金森君の挨拶
- 五、新副舎長選挙並びに新副舎長挨拶
- 六、先輩のお話
- 七、先生のお話
- 八、閉会之辞

開会の辞大岩君

先生、先輩の来駕を謝し、金森君を上げたり下したりするようと述べ降壇

副舎長挨拶

金森君は良く遊び、よく学んだ多趣味の人なり、この寄宿舍の旧時代から新時代への転換の功労者なりと先づ上げる。それより新角になる人への注意を陳べて下る。

舎生送別之辞

広瀬君 金森君の多芸なること、舎に入って病気をしたこと、等を先づ贈物、而して一年間の回顧、新角になる人への言葉等。

石君 吾の教育者となるのだから良くつとめてくれ、健康なれと。

大岩君 先づ不精があったと下げる。今は然らずと、若し理学部に入ったら又この舎に来てくれと。

藤田一君 金森君との同室生活、教へられた点、よく勉強したこと、語学に熱心なことを挙げる。

加藤君 一年間で金森君をよく知らなかったが、よく努めてくれるようと、自分のこの舎への感謝を陳べる。

天辰君 金森君は要領が良かった、勉強家であったと。

金森君 先生、先輩への感謝、自分の経歴、寄宿舍生活、将来の志望（理科の植物に入りたいと）、よく物事を批判的に見ると間違いは起らぬと、寄宿舍は肉体的つながりなること、自分の信念等を陳べる。情の切なる、つきざるものあり。

副舎長選挙に畑君十一票、広瀬君五票、本間君二票、かくて畑君新副舎長をおひき受けする。

畑君 何か寄宿舍につくしたいと思うことがこのに機会につながったから、出来るだけつくすことを誓って下壇。

先輩のお話

時田氏 この三年の寄宿生活が今後の生活の保証となり、楽しい思ひ出になると、別に会があるからと直ぐ帰らる。

平戸氏 不精はいけない、而し朗らかさは大切なり、新角の注意。

多勢氏 金森君は家庭的にも恵まれておる。元は身体は弱かったが今は元気なり。よく目的に向って努める人なりと。

今井氏 常の無沙汰のお詫び、よくつとめなさいと簡単に、(金森君と縁が深い)

亀井氏 いつも来て御馳走になる。よくつとめるようと。

犬飼氏 不精はいけない。自分の本分を全うするのが偉人なりと、知人の例を引いてお話する。

先生のお話 新角になる人への注意、よくつとめるよう懇切にお話しくくださる。

その後茶菓の饗応がありて、先生、先輩お帰りの後、来学期委員の選挙す。左の如し(略)

本日「櫓の音」原稿締切る。

二月十一日 本日紀元節なり、天気良好。

桜林、広瀬両君奥手稲ユートピアへ、大島君は手稲、増井、山根の二君は砥石へ各々出掛く。而して永井、若松の二氏は藻岩へ、夜月次会委員のコンパあり、他に三号にてのびる。暖かし。原稿締切本日まで延期す。予科教授服部品吉先生やめらる。

二月十二日 本日突然予科主事青葉萬六先生辞任の報聞く。驚き入るもの我一人ならず。

予科生全体驚き、こゝに桜星会総務、恵迪寮委員等計って生徒大会を開き、先生の復職運動を続けることとなった。松平軍縮全権は会議に於て航空母艦廃止を陳べた由。

二月十三日 天気良好にして雪大部消ゆ。文芸部委員、櫓の音装幀に忙し。藤田康君に表紙をたのむ、陸軍上海へ派遣。

二月十四日 日曜 桜林、増井両君手稲、広瀬君遥山へ午前八時に出掛く。天辰君はインターミッドルスキー大会に、午後山根、藤田一、永井、秋葉の諸君藻岩へ出掛け、夜六時になってようよう帰る。少々心配する。蓋し、牛乳と電車とが彼等をして遅らした由。本日新聞に依るとオリンピックスキー、ジャンプにて安達五郎選手八位の由、第一位はノルウェーのルードなり。方々で夜茶る。櫓の音発行す。

二月十五日 予科教授三田村孝吉氏予科主事との発令あり、本日又午後一時より生徒大会開催、而して青葉先生の復職不可能なるを以て名誉教授推戴に一致前進することとなった。

レークプラシッドに於けるオリンピック大会にて日本ついに無得点に終る。第一位は米国の由。大岩君理学部行き決定の由、目出度し。

二月十六日 昨夜来、降り続けの雪本日一日中一尺以上に達す。夜に至るも止まず。午後、桜林、藤田康の両君藻岩へ行く、大雪に驚いて帰る。そろ※※試験勉強を始むる様子各室に見らる、舎内静かなり。

二月十七日 満州新国家建設の第一回二頭会議開かるゝ由、早く平和の土となり、徒らに日本軍に矛に血ぬらしむざるよう望む次第なり。午後桜林、大島、永井三君藻岩へ出掛く。畑君級の方々とジルバー方面へ。夜方々の部屋にて駄べる声する。コンパなのか。新学期組合せ、畑来学期副舎長より発表あり、抽選（室の）は明晩なる由。

二月十八日 夕食後、室の抽選を行ふ。

国際聯盟いよ※※強硬す。抗議書を日本に向けて発す。午後、永井、藤田康両君藻岩へ、夜級会へ行く。

二月十九日 朝寒し。日本上海派遣部隊司令官、支那に対して最後通牒を発す。

二月二十日 朝厳寒なれど日中暖かし。午後増井、天辰、秋葉君藻岩へ出掛く。藤田一君風邪の気味あり。日本軍上海總攻撃開始す。本日普選第三回総選挙の投票日なり。

天下の選良只今日の一日によりて定まる。

満蒙連省共和国、中華民国より独立す。執政として旧清帝宣統帝なりと。

雪消えて満蒙の地に春来る。

青年寄宿舎日誌 [無題] 昭和7年2月21日～昭和8年3月31日

昭和七年二月二十一日

青年寄宿舎第三冊目の日誌を今日よりつける。

日曜日なれば不相変桜林、増井両君手稲へ出掛く。

本日、普選第三回投票開票さる。与党の絶対多数らしい。何時の時代にも日本は政府党勝利を占む？ひとり野党の悲哀のみならず。

上海衝突増々猛烈を極む。日本の総攻撃いよいよ急なり。

夜、三号にて茶る。宮部先生御病気の由（顔面神経痛）一日も早く御全快あらんことを。二月二十二日 舎内異状なし。夜、予科生明日授業第一時限のみの故か外出する者多し。

宮部先生其の后良好の御様子喜ばし。

候補者一喜一憂の中に国民の審判は下され行く。民政党の大物ぞくぞく落る。而して東京府より立てる朝鮮人朴氏の当選は一服の清気を加ふ。

二月二十三日 夜、決算を行ふ。一日四十五銭、食事部努力の跡顕る？決算後、委員慰勞を外出に誘ふ。多勢の舎生宮部先生を見舞、御気分随分悪しき由。蓋し来客面談影響せし由。早く御全快あらんことを祈る。

陸軍上海増兵を行ふ由。一気に大勢を決せざれば止まぬ支那人？

二月二十四日 もう雪も終りかと思つたに午後に至りて西北の強風と共に白雪粉々と舞上る。夜に至りて風増々加ふ。

大岩君本日風邪の気味にて終日室に閉じ込もる。昨夜の外出たつたか。

天辰君桜星会の決算決定会とて夜十時頃帰る。而も新しきスキー服をたづさへて。

宮部先生は今朝はかなり良ろしく、熱も下がりし由。喜ばしき限りなり。

総選挙に於て与党政友会未曾有の勝利を占む。三百四名とか。

二月二十五日 試験も目睫に迫るか、いよいよ勉強にいそしむ。壹年、貳年の予科生は試験の前哨たる製図に急がし。

皇軍敵の第一線突破す。ここに身に爆弾を付けて鉄条網を爆破身は一片の肉と散つて悲壮又勇壮なる三兵士の戦死あり。

アメリカは九ヶ国条約に違反すと息まく。

二月二十六日 予科第二時限より青葉先生（前予科主事）の謝恩会を催す。多勢参会で盛会なりき。青葉先生の話一時間にも渡り徳々としてつきず。

満州新国家「大満州国」と命名す。政体は立憲民主国と定まる。笹部三郎氏舎を訪る。

二月二十七日 舎内静かなり。猛勉強なればなり？而して疲れを回復する茶の音聞ゆシュツ々と。雪少し降る。宮部先生御見舞に二三の舎生参上、先生大部宜しき由、喜ぶ。

二月二十八日 金森君級の人々と三段にスキー行。午後桜林、増井の両君得意の藻岩へ試験前の溢れるエネルギー消耗に出掛く。元気なる哉、元気なる哉。

上海戦線異状なし。金森君いよいよ学校終りの由。

二月二十九日 四年に一度の日めぐり来ぬ。畑君は明日より予科生もあす一日の授業なれば心残りなるべし。夜、大岩、天辰君外出す。安田君遊びに来る。

国際調査委員、本日東京着。いかなる調査をなすか見物なるべし。

三月一日 早朝の雪降り夜に至りても止まず。畑君試験の走り、予科もいよいよ授業終る。四日より試験開始、水産は七日からとか。本日金森君の誕生日にて二号室にて御馳走ありし由洩れ聞ゆ。散髪せる頭なし正に頭脳明晰なるべくして。

満州新国家建国の日。

三月二日 珍しく雪が六七寸積って又世界は真白だ。寄宿舎の坂は早朝より舎生のスキーで賑ふ。昼食後、夕食後不平をかこつ舎生の舎の坂に滑る姿が見らる。

三月三日 明日よりいよいよ予科試験開始す。而して英気を養ふためか金森君、藤田君の二氏午後「火の山」鑑賞に、桜林君藻岩へ出掛く、他生猛頑張り。

白川大将上海軍司令官として出発す。我が軍完全に口北占領、第十九路軍算を乱し潰走す。

予科結城講師、教授となる。

三月四日 予科試験始まる。朗らかな所を見ると皆宜しき様に思はる。

宮部先生御病気全快御赤飯の寄贈あり。夕食にいただく。

三月五日 本間、広瀬両君も本日より試験始まる。土曜なので明日試験なき故割合のんきなり。活動へ行く人もあり。

三井合名会社理事長団琢磨男、茅沼某（21）に射殺さる。テロの横行なげかわし。

三月六日 殆ど全舎生室に閉じ込りて頑張る。

団琢磨男射殺犯人と井上氏の犯人とは関係ある由、又それを一団とする五人血盟団なるものありと。

三月七日 水産、試験始まる。明日終ると喜ぶ人もあると云ふに。

寄宿舎煙筒掃除に大の関係を有せる永井アル中氏突然死去すと。

三月八日 金森君の弟君二中受験のため来る、当分居らる由。

予科三年独語試験終了。桜林君明日無意根へ行く相な。

前仏蘭西外相ブリアン氏本日死去、国葬の由。

三月九日 ちらちら雪が降り出して午后に至りて本降りとなり二三寸積もる。

予科三年及英語農類二年試験終る。桜林君無意根行き（欠食）。

永井君相変ずドロウに急がし、樋口君角帽を買ふと云って大騒ぎ。

満州国独立建国式、執権推戴式行はる。

三月十日 予科全部試験終了。樋口君夜八時の汽車にて帰省す。新角を購入したづさへ帰る。全舎生新角のマネキンの様にもてはやす。桜林君夜帰舎（本日欠食）。

本日陸軍記念日なれば殊に係る時機なれば色々模擬戦等行る由。

大島君、奥手稲行き。午後、山根、天辰両君藻岩へ行く。

永井、若松の両氏製図に夢中、試験後にてかかる苦しみを舐めるとは・・・

三月十一日 朝九時の急行で大岩、藤田弟の両君帰省す。夜八時の汽車にて永井君帰省。舎は寂しみを加ふ。

桜林君午後藻岩へ行く。

三月十二日 朝九時の汽車にて大島君帰省さる。夜八時の汽車にて山根君帰省。

石君、本日突然退舎することとなり、直ぐ引越す。円山九丁目長谷川方

石君、三年の予科の時代をこの寄宿で過したが色々お世話になったことを陳べてお菓子を開き送別の会を催す。

午後雨になる。広瀬君人見大佐の送別会に行く。淋が増す。

三月十三日 本日帰る人なし。終日雨降る。夜金森君の弟氏帰る。

午後文芸部委員、桜林、天辰の三君の助けに依り図書整理を始む。

三月十四日 朝、藤田君、加藤君帰省。函館本線長万部付近 雨のため鉄道破壊せられて歩行しなければならぬ所を生じて心配しながら藤田君汽車に乗る。

桜林君手稲、増井君藻岩へ行く。水産本日試験終了なり。

三月十五日 朝、桜林、増井の両君、奥手稲行き（欠食）、朝少々雪降りて喜び勇みて出発す。

本間君本日試験終了。

夜八時の汽車で天辰、秋葉二君帰省す。残る者五名寂しさいよいよ加ふ。

三月十六日 午後、若松君帰省さる。雪少々あり、昼も寒し。

学部配属将校人見大佐赴任さる（岡山聯隊長）、満州に出征せらるゝ由、折角御健闘あれ。

三月十七日 記事なし。

三月十八日 畑、広瀬両君試験終了、之にて完全に今学年度試験は全く終了。

夜、十二号（広瀬君）にて留別会を開く。畑、広瀬、金森、桜林、増井、本間の諸君 談じて時の経つを知らず。

三月十九日 朝、桜林、増井君、二君元気にて帰省の途につく。

三月二十日 午後、金森君退舎、宿所 北十五条西三丁目 砂ヶ俣（サガマタ）方。

過ぎし三年間の君の労、多なり、相変はず健在なれ。

金森君卒業（臨教）退舎記念として金五円寄附さる。

〔欄外に・・・平戸君奉職 記念レコード購入（広瀬君）〕

三月二十一日 昼は比較的暖かいが、夜は極めて冷える。畑、広瀬、本間 老本科さんのみ、鼠も漸く騒ぎ初めた。

三月二十二日 予科入学試験開始。

夜、残留部隊、畑、広瀬、本間、の三君 最後の留別会 も亀屋にて開く。

三月二十三日 朝九時の急行で畑君旅行を兼ねて帰省の途に着く。

昼、本間君友人と一緒に定山溪に保養に行く。

三月二十四日 広瀬君帰省さる。

三月二十六日 夕刻、本間君帰宅。

四月六日 朝、大塚君帰舎。次いで天辰君帰舎（当日欠食）。

四月七日 朝の急行で山根君、夜中の急行で大島君帰舎、若松君又帰舎。

四月八日 朝、秋葉君帰舎。夕刻 加藤君、増井君前後して帰る。

水産マン何れも明日の忍路行に遠路わざわざ引張り出されし次第、もっと都の春を、いや、春にミレンがましい顔面でした。

水産マン、然し今年は鯉は豊年だそうで何とも

四月九日（土曜日） 朝夕二つの急行で誰か帰るものと期待してまちぼうけを食わされた心の淋しさ。朝よりの異常な気候の変動は終に雪を交へ夜に入りて地をおほう程度に積もる。トタン屋根に雪解けの小枝よりの滴を聞きつつ或はドヴォルザークの新世界にインディアンの生活を夢み、或はアレキサンダーの手風琴にクワツコーワルツに聴て来る春の交響楽を夢想して微笑する早春の一夜。

四月十日（日曜日） 曇、時々、吹雪 雨

本日より七年度第一学期の文芸部委員として大島正幸君青年寄宿舎の日々の生涯を書く。

特筆大書すべきは桜林新角殿の帰朝振りなり。札幌駅頭つれづれなるままに出迎ふるは山根君、若松君、天辰君、大島君の面々、残念なるは其新角振りは駅頭に拝するを得ず一同彼氏のさげるトランクの中にある新角に無念の涙をしぼる。医学部の開校を明日に控へてか医科の新角殊の他多し。恐ろしく混んだ九時四十五分着の急行列車だった。天辰君主催のティーパーティーに桜林君の所謂友情哲学の新たなる経験講義を一同傾聴。増井、秋葉両君本日より忍路実験所に折からの悪天候について顕微鏡ぶらさげ出掛けたれど漸く舎内賑やかになりたるの観（感）を呈す。

都に桜花の便りを聞くに今日は朝からの狂言的天候、猛然たる横なぐりの吹雪かと思へばカーテンの汚れが一層目たつ様になる憂鬱な細雨、昨夜の積雪に加へて再び澱粉時代だ。

市中「三越デパート不買同盟」の立かん板を見る。地方の金銭を中央に集中せしむ故に小売商人が不買同盟を作ったとて何になる。大資本主義の裏面にはそれだけ資本主義政策に関心をもてば欠陥がある。人間の趣向はそんなデパートで代表されるものでない。デパートで作り得ない個人の趣向を其場で製作して見せるこそ小売一般商人の利点特権ではないか。

札幌の商人、利益はまあ別問題として御客の心理状態を客観的に解剖して見てデパートに対する正々堂々たる策戦を練れ。

四月十一日（月曜日） 晴天とはゆかずしどろもどろの寒くはないと云っても差し支えない暖かさ。

朝、七時五十三分の急行にて樋口新角君帰りこれで青年寄宿舎新角四人組出来る（加藤君目下東京に注文の由にて単独ソフト）。

工学部新角本日より断然ノート取り、医学部午前十時入学式。

本間君、大島君それ三号、五号へ手を出しかけしがまたまたもとの古巣へ就寝仕る。つれづれなるままに町に潜行しきり。

札幌の街頭ルンペンいよいよ暮るかと思へば新興ドイツ国に於ては大統領二次選挙にヒトラーを圧倒的に押へてヒンデンプルク元帥たつ、かと思へば隣国アメリカにては十一月の大統領選挙にフーバーと民主党の現ニューヨーク州知事ルーズヴェルトの対立、既に起る。赤露シベリヤに精鋭軍隊を輸送する事之またしきり嗚呼満州を挟んで再度日露戦役起るか、はた又日米が第二次世界戦役か。時も時国際聯盟調査委員リウトン卿ハルピンに有って満州国政府支那政府の間に立往生の報あり。

四月十二日（火曜日） 藤田康君昨夜帰札、今朝帰舎。

相不変の天候、ついに午后に至りて雨、一段と寒さを感じず。

長年当舎に一同と居た大塚憲郷君、本日いよいよ宿決まりて退舎、北十二西二 笹本方大塚君送別退舎の挨拶行はる（三号にて）。

晚七時四十五分着急行にて畑君、藤田一君帰る。元気何れも顔一杯なり。

憂鬱続きの天候に晴れやかな気分漸く舎内に芽ゆ。

タイムスタ刊によれば本日ハルピン西方にて東支鉄道上にて我が軍用列車てんぷくせりと。

四月十四日 あさの急行にて長井君帰舎。これで予科ボーイ陣容成る。

既に新生入生にして入舎希望者確実なる処2名、其一名本日来舎、改めて十六日に来る由。増井、秋葉両水産マン午後相續いて忍路より帰る。四月一日の顕微鏡のぞきに両君折か からの鯁漁期に鯁の亡霊にとりつかれたと見えて鯁の肩をもつ事もつこと。

久しぶりの夕焼けに残雪の手稲連山白紫に黄昏れて其美しき事限り無し。

市内映画館「白銀の乱舞」、「旅愁」、「人肉の桑港」等々、洋画の大衝突に新学期の暇 日に見物に出づるもの多し。 本間旧副舎長より昨年度の会計報告有り。

四月十五日（金曜日） 畑君一号より愈特別室に移り副舎長の実務につかる。早々帯広中学出身の佐々木君来り、先ず藤田一君（九号）の増井君の移動を待つて入舎に決定。 最速九号に於けるチャーレンに我が寄宿舍の新大地を伺つて退く。其他、不意に札幌一中出身の入学者入舎を単独求め来たれども舎の内部を多少誤解して居る傾があつて畑君 一応熟考の末返答を与ふる事にした由。

舎の内外、或は内に部屋の移動、或は外にニューヨカボーイの来札にて漸く多事。

出来ることならば新生入生も吟味に吟味を重ねて選定すべきであると思ふ。これこそ舎の将来の凡であるからだ。

夕はんの食卓、今春初めてのオールスターキャストにて殊の他美味なりけり。

樋口君風邪模様にて床に就く。諸君、君等が楽しむ北海の春は目前にある。だが然し気候の変目此際一層自覚自重して来たるべき飛躍の春日に思はぬ不覚をとる勿れ。

四月十六日（土曜日） 夜来の憂鬱なる雨晴れ上がらず遂に終日だらしく降り通し、

我等の性気憂鬱其者なり。

タイムス朝刊の理学部入学者発表氏名中に金森久良君の名を見る。第十三回臨教卒業其志望植物学科に目出度選抜試験を通過して入学された事同慶の至りなり。聞くとおころに依れば同君の弟、明朝来札入舎さる由。

土曜の午後、外は雨なれば絶好の移転日和なり。長井、樋口、天辰、秋葉、増井の諸君続々と移動を開始、所定の部屋に納まり込む。

内地方面の新帰朝者それぞれ弾丸多く今夕のチャーレン盛観を極む。

宮部先生昨夜東京より帰札、畑君、大島君夕刻先生宅を訪問す。

四

月十七日(日曜日) 雨後快晴

久

しぶりの恵天、午後より外出する者多し。

本日、新入舎生二人あり。帯広中学出身佐々木倫太郎君(工類)、金森久良君(工)なり。佐々木君については既に実に寄宿舎始めて以来の大テーブルにて話題の中心になりたる人、金森久良君は理学部植物科新入の金森久和君のブルーダーなり。語学の達者なる事、実に久和君以上の事、親愛なる我等の久和君より承る。

早速特別室にて歓迎コンパ開かる。一同車座になりて例年の如く自己紹介を行って後、舎生の親愛味の有る家族的な他愛もない駄弁振りを充分に披露す。

果たして個々の人物に付き如何なるインプレッションを我等が新しき友が持った事やらぼつりぼつりと臆て語るであらう所の印象談こそ興味あるものなれ。

四月十八日(月曜日) 予科新入生初登校。ほがらかな朝なりしに、こは又なんと烈風ふきまくる今宵なるぞ。ストーブの煙突もそぞろ安否がきづかはる次第。

八時より著名なるピアニスト ブライロフスキーの約四十分間に渡る放送有り。テクニシャンとしての演奏を舎のセット故障の為、舎にて聞き得ざりしは甚だ残念なる次第なりき。

外、街頭に得意満面たる予科新白線ボーイ有るかと思へば、遠く父母の膝下を離れて来たのか異郷の地に自信なげに一足二足に吟味しつつあるかの如く迷ふ新白線帽も有り。なんと其可憐さ、其純情さよ、純真さよ、この北海の地に溢る生気に育まれてより一層 人間的な美的素質を基 [ママ] け。然してあくまで純情であれ。

四月十九日(火曜日) 呪ふ可き天候なるかな。起きれば快晴の夢空し今日またまた終日雨なり。梅雨にしては桜が咲かぬ。だがまて北海道には梅雨は絶対無い筈だ。げに呪ふ天候なるかな。午前十時中央講堂にて予科、実科専門部、水産新入生の入学式行はる。新学帽諸君登校第一歩を跡すとは云へ、この天候は何ともお気の毒に堪えぬ次第である。大学新聞91号発行さる。

北大医学部第二回卒業生にして北大スキー部を今日あらしめた医学部の広田戸七郎氏、本学を去るとの報有り。其他理学部入学者氏名中に昨年度終了した第十六臨教の卒業生が数多、金森君と同様に入った事を知り大いに人の注目を引く。

昨日、入舎決定された小林敏之助君(水産製)都合に依り入舎取消さる。

雨の夜なるか、早く床につく者多し。当然の現象なり。

天辰君同室の嘉しみを以て大岩君を駅に迎ひに行きしが目的を果たさず。然れども其意気や、嘉しみや、誠に真に以て愛す可し、讚ふ可し。

四月二十日（水曜日） 旭光窓辺に訪る。快なるかな朝の外気、小鳥の枯枝にすがる愛らしきその鳴声、春又遠からず。

舎内極めて平穩、連日の雨にて、池水満々として一人蛙の戯れ声もまた早春の夜の一興に非ずや。

四月二十一日（木曜日） 朝の急行にて大岩君得意の体にて帰舎。天辰君の憂鬱晴れたるの感有り。夜の急行にて広瀬君も帰舎。はからずも全メンバー揃ひて七号にて大駄弁を振るふ。一日置きに雨が降る。雨が降る。タイムスタ刊に朝鮮部隊と交代入満せる 姫路〇〇団の写真中に前配属将校人見大佐の勇姿を見る。

四月二十二日（金曜日） ストープの炭欠乏して寒さを感じとはけだし驚いた気候だ。例年の取はずし規定日十五日を過ぎて末にこの調子が続くならこのまま炭をたいた方がすみ火より遙かに経済的である。

理学部新角本日初登校。

四月二十三日

勅 軍人勅諭御下賜五十周年を迎へ、本日は官公庁休み、北大も各部に渡って殆ど休みであった。めぐまれた晴天、休日の午后を畑君以下十数名郊外三角山にいたる。けだし 春の近郊たん索のトップである。

中央講堂にて本日の記念日に因んだ活動があった。これに見物に行くもの、或は街頭進出するもので夜殆ど外出。

牧笛原稿募集の第一面の告をなす。〆切五月三日、発行六月一日の予定。

本日より神宮外苑グラウンドにて春の六大学野球戦ひらく。

四月二十四日（日曜日） 軍人勅諭御下賜五十周年を迎へ札幌市に於て二十五聯隊を先頭にて各中等学校の分列式公会堂前にて行はる。

北大予科二年、水産実科二年之に加はり、天辰君、増井君、秋葉君早朝より中島めがけて行く。午前中、之等の分列式 並びに行進を見る為か人出がきはめて多い。

そろそろ植物園が賑はって行く。

四月二十五日 またまた雨、雨。分列式に参加した連中、今日はやすみ、大いにのびて居る。大岩君、天辰君六号室にて別荘の積りで仲良くねる。

四月二十六日（火曜日）晴 そろそろ春の仕度が、スプリングコートがばっこする。依然として外出者全盛、楽しきかな新学期、楽しきかな若人、春の宵。

軍人勅諭五十周年を記念して帝都にては銀座の上空、地上をねる陸海のメロディーあり、或は海軍機の爆音に、或は軍楽隊の勇ましきラッパに都会人はどの程度迄ミリタリズムをのみこんだであらう。 賄に新人来る、手不足に困る小母さんの為に大いに気休めになる事に違ひない。小母さんが度々手伝人を苦心して求める一 我々十八人の賄に 小

母さん一人の手では余りにも負担が大き過ぎる一 其労苦、なみ大抵でないと思ふ。四月二十七日（水曜日）

靖国神社臨時大祭につき休校。折から恵まれたる晴天に積雪から解放された喜びを、郊外に植物園に求める札幌市民の出る事、出る事。

札幌の人は散歩好きな人達であると思ふ。

この日、増井君、桜林君、広瀬君勇躍スキー担いで最後の無意根スキー登行をやるかと思へば、藤田一、康両君、山根君、大島君銭函海岸を張碓迄、鯁の香を求め行く有り。盛んなるかな。

本日夕食後、新委員にて三、四月の決算を行ふ。三月、四月と区別して行はず日数を合計して全体の決算をしたので予想以下の値ですんだ。

一日の食費 [金額 記入無し]

四月二十八日 天辰君パーレット六八の写真機を五番館にて購入し、其スピード、モーションに我等一同あ然たり。兄貴株の大岩君のパーレットの活躍振りは既に其方面に於て定評のあるものなれど、これは又素晴らしき一同志を得たものである。噫 世は 春なるかな。

四月二十九日（金曜日） 今日の旗日は又再び絶好の散策日和、例に依って所謂小市民的明朗な団欒の諸所に見受けらる事、なるほどこう見ると札幌はインテリ色彩の多分な都会である。

畑君、藤田両君、金森君、佐々木君、増井君大挙して藻岩山に朝から雪食ひに出掛ける。この行たるや特筆大書す可き偉功をたて、堂々長井肇造氏所有に拘はるストック、スキー帽を藻岩山より我が舎に持ち帰へりたり。こは長井氏が去んぬる冬日に藻岩山スキー登高を計てたる折、不幸にして雪崩に遇ひて失ひしものなり。

「あの時は地球が二、三回、回転した」と長井君、ストック、帽を見て追想に耽る。

いづれ盛大なる披露の宴ある筈と、我等一同期待す。

桜林、若松君等の植物園党、午前、午後にかけて繁く通用門を出たり、入ったり。

本日、上海に於て天長節祝賀の式行はれたる際数名の支那人及、露人式場に爆弾を投げ折から居はせた白川軍司令官、野村遣外第一艦隊司令、植村○団長、重光公使等々何れも重傷せりとのラジオニュースあり。三越は開店を控えて出火をする等々、札幌市中、異常なる人心の動揺有り。一同九時四十分のラジオニュースに耳を傾く。

四月三十日（土曜日） 午後七時より新入舎生歓迎月次会晚餐を開く。委員 藤田一康両君及び、天辰、樋口の四君の努力にて素晴らしき料理出る。例に依って机を借用し、白紙をめぐらし、速成テーブルを作る。宮部先生、亀井、時田、鈴木、平戸の諸先輩を迎へて会食す。

十時、恒例の順序にて月次会を終り、諸種相談に移る。

この夜、新入舎生の意気や近來になき面白さ、真剣さを示し、は誠に将来の為祝福にたえない

先づ佐々木君立って一生をレールを友として鉄道方面に入りたき将来の希望を淡々と述べるかと思へば、金森君は恐ろしく慇懃な態度にて後に述べられんとする先輩及び宮部先生の御話にまで前以て礼言を述べて先輩連を大いに恐縮さす。

我等舎生、広瀬、大岩、増井、若松、大島、桜林、本日の諸君こもごも立って歓迎の辞及感想を述べしがそれぞれの既往の体験を語り以て我々の団体生活の極めて有意なる事述べて意見の一致を示す。

終って茶菓に移る。いつも感づる事であるが我々がも少し打解けた気分になりてこのくつろいだ時に先輩達と交談したいものである。我々は余りにかたすぎはしないのだろうか？

五月一日（日曜日） 札幌三越本日花々しく十字街々頭に開店、不買同盟其他種々なる妨害運動ありたる様なれど結局は中央の大資本主義には一の手もなかったと見え、今日の人出は又なんと云ふ物凄さなんだらう。 広告軽気球、丸井と三越に上がりて先づ（商売）デパート戦線異常あり。

大塚君ひんぴんとして来舎。天辰君、小別澤を越えて右股方面にアラインゲーエン〔単独行〕以て 其情趣を絶称する事、する事。

月次会の翌日とて諸所に兵糧山積、極めて固形物豊富の模様。

五月二日（日曜日）晴天 本日夕刻ストーブ取除く、約半年の任務を果たして今年は格別の慰安を与へて呉れたストーブであった。

晴天に乗じて夕飯後大挙して桑園方面に散策に出掛く。

池の水日毎ひとごとくに量を減じ鮭〔鯉？〕の世界が漸次縮まりつつある。セキレイ、池沼に餌を漁る窓辺の景かな。

本夜、牧笛原稿をしぼる。一人当四枚、五月二十五日迄切る。

五月三日（火曜日） 中央講堂に於て本科学部新入生に対する宣誓式午前十時より行はる。南総長折悪しく病にて見えられず淋しき事限りなし。尾崎学生課長の発言にて須田農学部長総長代理として人格の養成、知徳の錬磨、思想問題、体育、スポーツ増進奨励等に関し簡略に訓辞を述ぶ。学部長に出張或は病にて欠席極めて多く、宣誓式を本日わざわざ行ひたる所以を測り難し。

火鉢の選を行ふ。 本間君、本日タイムス発表の市電の選に洩れて残念がる事、残念がる事。

五月四日（水曜日）

五月五日（木曜日） 予科桜星会新入生歓迎会催さる。

端午の節句を祝し午後七時より食堂にて茶菓の饗応あり。

樋口勝良君（医一）今般健康上の事にて退舎さる。同君昭和四年度の所謂中堅組の一人なりしが、四日以来腸カタルにて健康ず遂に退舎されしは真に遺憾の極みなり。

五月六日 朝来天候陰悪、夜に入りて風蓋し強く暴風模様となりしを以て遂に明日にせまりたる薄別温泉旅行を中止す。

大塚君、石君、樋口君等の退舎にて三月に発表せしコンビネーションに支障を来せしを以て、ここに改めて畑舎長より組合せ変更の発表あり。

一号	応接室	四号	加藤君
五号	大島君	六号	大岩君
七号	天辰君・藤田康君	十号	永井君・増井君

日支諸交渉漸く順調度を見せ、最後の円卓会議開催の気分濃厚となるかと思へば内に出征兵士家族の優遇を叫ぶ悲痛なる現象あり。夜を世をあげてインチキ学校の内情調査に心を傾ける文部省の公正なる態度には又々、私学なる故を以て教育観念をいや教育そのものを全く企業的に見て肩を張る社会分子が居る。

日本 果たして内外共に一大危機にのぞめるや否や。

五月七日（土曜日） 朝 稍陰悪なる天候なりしが俄然好天候となる。薄別行に新入生諸君定めし天の悪戯に憤慨して居る事と思ふ。

晚餐は薄別に行きたる積りで牛鍋に一同舌つづみす。往来立通ふ人の顔の浅ましき表情。仏国大統領ゾーメ氏は一露人の為射殺さるとの報あり。重大なる国際問題である。東西 露を挟んでますます多事なり。

五月八日（日曜日） さしこむ朝日に大岩君きん然大掃除の第一階程なる曇乾しを早朝より断行して近所隣に大迷惑を掛けて一人得意然たり。蓋し、春季大掃除のトップを切りしものにしてお陰で思はぬ早起きに三文の損をした連有りとか。然し、この偉業も終末の美をとどめず朝来気温低下し天候悪化し午后にいたり遂に雨となる。

この日、慶明二回戦有りたれど東京も雨にて雨中の戦もドロンゲームとなりき。

薄別温泉行きは前記の如き事情にて中止のやむなきに至れどこの春の日曜やべん当注文にて大部遠出を計画したる舎生ありたれど、この降雨に誠に同情に堪えぬ。

円山の桜咲きそめ人出に賑ひたる様子なるもこの雨では花見どころではあるまい。

畑君午前中登校、ウズ巻ポンプのドロー三枚書上げて意気揚々。午後は食堂にて十八番ピンポンにてチャールストンに踊り狂ふ。蒲間君三兄弟妹来舎、広瀬、畑、藤田康、大島君等と五号にてトランプに興じて夕刻帰る。

蓄音機の修理なる。

五月九日（月曜日） 雨上りの朝、殊の他麗しきかな。

夕食後運動部の提言にてテニスコート修理をなす。

七時より慰労コンパ有り。円山花見の話もち上る。

五月十日（火曜日） テニスコート修理引続き行ふ。裏の大谷の親父をして塵箱を移転せしむ。舎として当然とる可き手段、人の家の庭に塵箱を置いて移動を命ぜられてもオヤジ何も憤慨する事はないよ。

掘返した軟き地の上にて天辰君、大岩君、本間君、畑君等織田幹夫の三段飛世界記録を目ざして盛んに虚勢を張る。

焚火にくすぶるは小老人ミスター チェリーなりき。

五月十一日（水曜日） 円山花見本日断然決行。5時畑副舎長の厳格なる数回のチェックに一同起く。大島君事情に依り後より電車にて出かけし他二三の自転車隊と共に円山に歩み例年の如く札幌神社参拝後、休憩所にて持参の茶菓をほうばって花見をす。花七分なるも蓋し目的はこれで十分に達せられたりと信ず。然れども余りの早起きに面食らった者多しと見え、終日、虚を突かれた様な顔をして居った連中極めて多き様に見受く。従って、今宵各部屋極めて静かなり。

コート修理 第三日目。

五月十二日（木曜日） 加藤三郎君、本日退舎。三月以降、大部、舎に移動が行はれたが、然し、ここに自然淘汰が適宜に行はれて舎の空気が再び静まった様に感じる。退舎の理由は樋口君同様、健康上の事にある様見受けしが実際は其以上の何ものかがある様に思われる。

人数が多くなる事も喜ばしい事だ。だが然し、其処には矢張り人数に比例して、個人的のかかまり合いが多くなり易い、結局出る可き人は出て均一状態に帰ったんだ。さ、これからだ。僕等がいよいよ一致団結して一大重大事にとりかかるのは。

五月十三日（金曜日） 起きれば珍しや雨なり。終日降りて木々の新芽をうるほす。

試みに最近の新聞紙上を見給へ、人間の死んだ事ばかりではないか。春や、か程までに人の死を要求するのか？

過日、突如東都六大リーグより脱退した早大の問題紛きゅうして、未に解決つかず、いくら学生スポーツの純情化を叫んだとて、リーグの一メンバーたる早大がメンバーシップをつくさずして利己的に脱退するの否を論ずるも之又当を得た見かたである。

薄別温泉よりの「手違ひを生じた」と云ふ葉書により明日はこの行を決行する事になると信ず。 雨よ 晴れよ。

五月十四日（土曜日） 雨雲依然として去らず、然れども延期を更にするにしのびず又我等が薄別行途は天を衝く何物があり。ここに本間君を除き春季新入舎生歓迎旅行を決行す。

午後二時二十五分豊平駅発、土曜の午后とて定山溪に一夜を目指す所謂有閑市民の非人然〔ママ〕の多き事。

三時過ぎ定山溪着。相変らず感じの悪い駅前風景、山から冬季中に切り出した大材木が路傍にごろごろしてる処を天辰君を先頭に薄別に向ふ。時に陽光を見るも概して写真には不向きの天候、前日の雨にて靴は泥土の洗礼と角ばった不細工の砂利道(石道と云った方が適当だ)に這々の体で温泉にたどりつく。

路傍の動物学者藤田康君、アゼ道に山椒魚の卵を発見して喜ぶ事又限り無し。

アー、雪に親しきこの温泉、無意根の裾の僅少なる残雪を露すのみにて陰鬱な夜に入らんとす。アー、残念なる哉、天候のいたすところこの行の興たるや特に半減する感あり。後発隊の大岩、桜林、若松君、遂に牛鍋の香に引きづられて六時頃来って座大いに賑しく

なる。

晚餐のめしの量は一人当二合、即茶碗五杯の制限を食事部より受く。然れども我等大いに食い、大いに談じて、遂に全量を退治し湯に入る。

湯船の猛者、ここに藤田一君、増井君の両大関を見受けて筆者大いに驚く。薄別川のせらぎを通して其かみ合ふ叫声は部屋にノートラに興ずる者に迄に認識せられたり。

十時過ぎ恒例に依りへボ抜きを行ふ。角帽（人数十五、増井君角組に加）対予科・水産と行ひ、三度やり三度角帽退敗、フレッシュマン舎の特芸に唾然としていくら説明しても理解しかねる様子なりき。本間君の蕃声を聞き得ぬ事は大いに残念なる次第。又トランプの多分の才を有する本間君の来られざりし為、トランプ界にも不景気風吹きまくりたり。然し、ここに収穫として記するにたる事は畑君のノートラを吹く様になった事である。

最後のジェスチャーに入って、それぞれ奇問、珍問に笑いの連発なりしが特に康君の山椒魚、長井君のギャングは本年度の傑作なりき。

五月十五日（日曜日） 今晩、藤田一君の実に物凄き寝言あり。其音声たるやさすが寝言の大家たるに十分の資格あり。内容はここに人格を尊重して控へざるを本職の公正なる態度と認む。然れどもこは人格上に妥当性を欠くが如き場合あれば直ちに登録する必要ある程の言である。

薄別の朝はかくして八時過ぎに明けたり。谷間に藪鶯のインチキな鳴声を聞いて一応床の中で詩人肌を出す。

午前中は湯とトランプと或は釣にそれぞれ三まい境にひたる。

宿の小母さんが肥えていないよと云ふにかかはらず天辰君一尺近くのイワナ釣橋の下にて釣上げ、それよ我も我もとてインチキ師の出る事、出ること。遂に康君がけを上り損じイワナに釣られてふろに飛び込む番外余興出る。

今年は何年来遊ばれた裸踊りは盛んではなかったが其代り風呂場は目もあてられぬ修羅場と終始化したり。人間性の何と浅間しき！！一週間前に温泉の小父さん、小母さんを待ちぼうけさせて憤慨させたんだらう、其代償として本日の部屋代二十五銭づつとられて一同宿を出て憤慨す。

一同無事定山溪着、途中無意根の白き姿も見て三時四十分の電車にて札幌に向ふ。

世は花見に、札幌は之人世の醜場なり。三吉神社の大祭とか。

本日五時半、帝都に於てまたまた爆弾事件のため犬養首相倒れたり。ラジオのニュースを聞けど余程の重大事件らしく其要領をを知り得ず。

テロ恐慌す。 あゝ一体何の理由ありてか、かかる事件を引起すぞ。心外の念にたえず。五月十？日（？ 曜日） ???テニス日和、この日コート修理完成祝を兼ねて恒例のテニス大会を開く。

〔2頁ほど 空白〕

五月二十七日（金曜日） 海軍記念日である。軍国日本依然として往年の東郷提督の偉勲を慕ふ心は同一である。

大島君其他工学部の連中月寒に鉄砲打ち、大島君 総計二十点とは往年の意気なしと云ふ可きか。文武会デーを目がけてリュックサックがのさばる町に

五月二十八日（土曜日） 齊藤内閣初の閣議を開き新聞紙上大いに其ニュースは世人の注目を引く。

快晴 久しく雨をみぬので一台の自動車の為に埃煙を蒙るのは誠に口惜しき事なり。

畑君、大賀教授と共に同級生と放課後、直接に無意根小屋に行く。春の好天気恵まれて北大校庭中等学校相撲大会或は北中対予科ラグビー戦に近来の人出なりき。いよいよ北海の緑天地スポーツシーズンなり。

牧笛メ切期限近し。

五月二十九日（日曜日） 晴のち曇り

迷夢の暁は窓辺に訪る。一羽の郭公の明朗なる声にて破らる。或る者は金鈴と想ひ、或る者は幸を呼ぶ声と床のなかにて想ふ。

二羽の鳥も数日来池沼の残物を拾って巣を作りつつあったが今日から姿を見せなくなった。

朝より干城、藤田康君自転車に月寒方面にネタを拾ひに出掛く。

夜は二人揃って写真の現像に忙し。 七号室、サンショウ魚解へりてグロテスクますますつづのる。

春だ。 相変わらず街の人出は素晴らしいものだ。

畑君、帰舎は明夜に延びたとの事、友人より報有り。

オリンピック予選（陸上）、神宮にて行はる。

五月三十日（月曜日） ??素晴らしき快晴。朝寝を志した士も勇みたつて藤田一君発案の手稲山登高に参加、会する者、本間、大島、桜林、藤田一、山根、若松、増井、佐々木、金森の諸君、真に誠に盛大なりき。

文武会デー 第一日 午前八時半の列車にて軽川に向ふ。惜しむらくはこの行の唯一の花形藤田康君出掛けに急に靴の修繕受取りを思ひ立ち為に遅れて来らず。あくまで「青年寄宿舎」徹底せしむる勇なるかな。 晴れて後ヒュッテにさしかかる頃小雨となれど休憩後頂に達する頃、残雪を見る喜びは折からの転望、展望に依る喜びと共に大いに天候に幸せられたり。ただし登山道の泥状以て本間君の姿を以て瞑す可し。この行たるや大島、増井両君の写真師の活動に依り手稲登高の趣は半減せられたりと云ふも敢へて過言に非とか。蓋し、物は考へ様なり。 一行無事時刻帰舎。前後して畑君も無意根より帰る。

広瀬君、学生青年会の連中と発寒方面にハンゴー炊事に行く。

舎に淋しく残るは大岩、天辰両君のみ、天辰君最近心境の大変化あり。注意す可し。写真にこるもモットモなるかな。

夜六時より市公会堂にて活動有り。白魔、蜂の実撮、栄冠涙有り等、相当の入りなりき。
五月三十一日（火曜日） 文武会デー第二日 本日は公会堂に於いて新入生歓迎の大園遊会行はれる。昨日の手稲登行にてへばりたる為か今朝は悠々と部屋にこもり出ず、十時頃のこのこ手拭ぶらさげて園遊会も何のそのである。十一時頃出掛けた大岩、若松、長井、藤田一君連、公会堂に於ける固形物を植物園にもちこみチャーレンとしゃれこむ。この日植物園、都埃を他に、実に砂漠のオアシスなり。

六月一日（水曜日） 天辰干城君並びに藤田康君、写真道に最近夢中の体なり。

えぞはるぜみの鳴声を植物園にきく。

六月二日（木曜日） 雨降らず五条通りを東西に吹き通す砂塵は特に人の命を縮ましむるかと思ふ程なり。

夕食後のテニス、大いに盛んなり。絶好のテニス日和なりき。

六月三日（金曜日） 晴れ 珍らし、桜林君、例になく七時前に起きて天候激変するかの念をいだかしむ。何と今朝は朝帰党の朝起きなる事よ。

快晴に、快晴、誠に結構なれと札幌の塵埃は一体どうする積りだ。

南十一西四に再び天然痘患者いづ。種痘を断行するもの舎中に多し。

畑君、大学病院にて歯の抜とりに大手術を行ひアゴにはちまきして帰る。今迄経験せる歯の治療中最も痛かったと今日はショゲかへって居る様子。

牧笛原稿漸く集まり、五日発行の予定。

六月四日（土曜日） 畑君の物々しき姿に俄然舎内緊張したかの観有り。終日頬を押さへて痛みに堪へかねる様子、気毒に堪へず。

牧笛に応募者まだ出る様子、既に発行してもさし支えなきも我等が同人雑誌の主趣のある処を尊重してここに暫く余裕を残す事にする。

六月五日（日曜日） 晴 そろそろスズランの季節である。

散策日和に円山、藻岩登山を試みる者多し。

この日、午後オール北大対立教新人の野球戦、苗穂球場にて行る。カレッジ戦と云ふ点に興味があったのか、かなりの人出であったが、矢張り商売人には歯がたたぬらしく七 対二で惨敗する。

六月六日（月曜日） 依然、気になるのは五条通りの砂塵である。

六月七日（火曜日） ここに全メンバーの顔揃ひ、牧笛の発行の日を迎ふ。

総数九十七頁、頁数にせば多少物足りぬ処がないでもないが、然し其内容を検討して其エッセンスを求めんとするならばこれ程内容豊富な、各人がめいめい、それぞれの筆癖 を振って書きなぐったものはないと思ふ。

文芸部委員として、嘗て、声明せる期日に刊行する事の出来なかつたのは誠に遺憾の極みであるが残りなく舎生諸君がこの小雑誌に好意を寄せられたるに関し心から感謝する。これで三十七号の雑誌だ。持廻りの順は、水産が試験が早いと云ふ事を斟酌して 七号一六号一八号一九号一四号一十号一三号一十一一十二一特一五、従来にない方法

にする事にした。滞室期日は一人一日にしてもらった。

大いに読んで批評欄に諸君の意見を吹きかける事を望んでやまない。

外は斉藤挙国一致内閣で政治的の癌がおさまったかと云へば、新聞紙上には上海派遣軍司令官植田師団長の松葉杖姿の凱旋で三面記事に大きな活字が跳って居る。

六月八日（水曜日） 食後のテニス熱盛んなり。

喜ぶ可し。今宵 十二時 雨模様だ。

六月九日（木曜日） 昨夜、雨がふった。然も適量に。今朝の地の皮はほのかに湿気を帯びて、今日も繁ったアカシアの葉陰に濃艶な香りを誘ひ出しさうな気配であった。

かくの如き状態に幸ひこの上なしとでも思ひしかどうか早朝六時よりの大岩、畑、桜林、諸君のテニスには夢をむさぼりつつあった連中には偉大なる驚異であったらう。然し、このテニスももともとが気紛れから起こったものであるから長続きはせぬ事之れ受合ひ。

恐ろしく寒い。一度積み重ねた火鉢を再び部屋にかかへこむ様な次第である。

ラジオ、東京よりの中継にて三浦環女史の放送あり。

君よ知るや南の国、庭の千草、夜の調、等現代の若き女性の好愛する面々をズラッと列べて、然もあの若々しき肉声を以て歌ひこなすとは全く五十を越した人に対しては驚く可き事である。

六月十日（金曜日） 舎庭のエルムの葉陰、斜に彩りてテニスコートに熱球とぶ。

暮れが遅いと云ふか日が長いと云ふか、この調子だと八時頃迄テニスがやれさうだ。嬉しいことだ。

相変らず諸所にスリッパの塊りが出来る。

六月十一日（土曜日） 大島君等機械のパーティー吉〔古カ〕谷のキャラメル工場を見学して帰る。広告まけのする程設備は貧弱なる由。

ワン君〔藤田 一君のこと？〕喜べ、森永にまだまだ寿命があるぞっ。

三越ギャラリーに目下来朝中のチャップリンの映画を中心とせる写真展行はる。

畑君、大賀先生宅にバテベビーのレセプションに行かる。帰りが遅い。けだし過日の無意根山登高に話はずんで居る事だらうと.....

六月十二日（日曜日） 物凄い砂塵だ。終日札幌市民はこの風に悩まされ通しだった。午後、グラウンドにて予科対小樽高商野球戦行れ、予科フレッシュマン、球場に感激の一 場面を味ひに行く。結局、危いゲームをして予科に凱歌あがる。開きは八点の差である と。

球場より帰る佐々木、金森、其他の予科ボーイの顔は埃で真黒だ。

藤田康君、大島君、島松に鈴ラン狩りに行く。

島松の花は年々変化する模様とか、大島君、往年の日を思ひ出してガイタンひさし。

六月十三日（月曜日） 埃の町だ。そう声明せざるを得ないではないか。一台のの自動車の通過は舎に居る僕等にとっても苦痛だ。決して舎の建物自身を攻撃するのではない。自動車運転手の無智、無遠慮と摂理の依って及す所を恨む次第である。

去る週間から予科体操場にて本年度体格ケンサ行はれつつあり、毎年この頃になるともちあがる話しは大岩君のヤセタ、ヤセタと云ふ声とキログラムを貫に換算する小学生共だ。

松竹座にウェスターン発声機来るとて喜ぶ連中は誰と誰か。

青年寄宿舎の夜は最近鯨のくん製と共に更け行くと云っても敢て過言でない。

六月十四日（火曜日） 札幌市は今夜から祭典気分に入るんだ。祭典には日常業務に忙しくて遊べない人々が自由を与へられて横行闊歩するかと思ったらこのアブノルマルな町の雰囲気にはこれは又物珍らし顔にそぞろ歩く舎生もある。

毎年祭を控えるともち上る話は鉄道自殺の話だ。

大岩君、何を感じたか、最近、沈思黙考する事甚し。内に心をいためるもの、あに天辰君のみならんや。

夕刻、適量の豪雨有り。一同狂喜する。

六月十五日（水曜日） 御本体が頓宮に御仮泊遊ばさった。

祭りも本調子だ。 全道教育機関は休み、吾が北大も午後から例年の如く休業。

東京にコレラ発生する。

六月十六日（木曜日） 大岩君、気でも変ったのか、砂糖にメッキがしてあると云ふとこまるとて天辰君、心配する事、心配する事。小母さんのスターリング事件あり。朝に 夕にあじが変でさすがの健啖家も往生する。

六月十七日（金曜日） 月次会委員 大岩、本間、大島、山根、町に買出しに行く。

六月十八日（土曜日） ???はますます増大する様子

本科マン同志の寄り合いで月次会の準備を行ふ。予科、水産は試験が近いとの事でこの際本科マン同志が任命された次第である。

本学期最後の月次会である。料理に委員が奮張ったのに引きかへ宮部先生以外に誰も御出にならなかったのは淋しい事であったが、先生を中心として舎生がとりまいて御話する事は誠に滅多にない事である。

宮部先生この度米国の有数なる科学団体のフォーレンオーナーメンバーの一つに指名され、これを御受けになったとか日本で云へば学士会の名誉会員の如きものとかで、特に 植物学方面に関しては先生の他に世界中二人しか居ないとの事。我等真に御同慶の至に 堪へない。特に先生はこの事を私的に取扱はんとなさる御様子あくまで名誉を pure に

保持して行かる所に私共大いに学ぶところがあると思ふ。

この日、晚餐の模様、幸にして当文芸部委員、其職にたづさはりたるを以ていささか概略をのぶ。

1 サシミ掛長 本間君 2 スープ掛長 大岩君 3 ウリモミ掛長 山根君
4 ビフテキ掛長 大島君

以上、分業的にキビキビとやってのけたところ従来の月次会に見ざる鮮かさと云ふを得れど見積もった先輩の御出が少しもなかったため西村の菓子数十個余る。

月次会に移りて、主として舎生の夏のプロ、新入舎生のこれ迄の舎生活の感想等のべる。特にフレッシュマンには夏が今夕からでも来た様な話ふりには全く愉快の念をいだかざるを得なかつた。

終りに本間君より四月以降舎内大部変転あつた事につき我等が退舎生を余り冷淡にしすぎはしないかとの注言があつて、一同考へさせらる。

月次会終了後折からの名月を楽しみつつ農場方面に行くもの多し。

月下に既にアカシアの花の咲くを見る。断然今年は花が早い。

六月十九日（日曜日） この日新に大鐘を買ふ。

晴天 思ひきりねるもの多し。

植物園に小市民的な団らんが諸所にむすばれダンゼン朗らか。

桜林、大岩、大島の所謂街頭三勇士、今日はオールスターキャストで御出になつたと舎の雀どものうるさい事。

町に出る良し、遊ぶ良し、学生だ。だが学生と云ふ割合に社会的に自由な地位にある事に拘泥し過ぎて仕舞ふ事はこれ又考へものだ。凡そ学生生活に、いやこの寄宿の長年の歴史を保つために諸君自尊心と自覚を交互に交ぜたスピリットを忘れぬ様にしてほしい。

夜、月次会慰労のコンパは特別室に合流して大だべんとなる。

六月二十日（月曜日） 大島君、顔面に麻疹様の皮膚病に犯されX線治療をうけたとか。其他の諸君 健在。試験が近づきそろそろだべんが落ちつきにかはる。

六月二十一日 増井君、秋葉君、明日を控へ大車輪。

六月二十二日 水産二十周年記念を今夏行ふため特に試験を早め本日より行はる。予科ボーイの気分も漸次落着いて来る様子。

六月二十三日 晴 昨日、太陽に傘かかりしも雨ふらず。昨年は雨のため凶作、今年は日照りのため凶作、これでは北海道毎年々々来る年凶作、凶作だ。

最近、舎のメシがまづい。めしが変わつたためだらうか。

本日より北大トラック第二種の公認グラウンドとなる。其皮切りは本日行はれた庁立の運動会だ。

六月二十四日（金曜日） 晴 本日も晴天だ。百姓が連日空をながめて泣いて居る事だらう。

北海道号の命名式が行はれ、其爆音の喧噪なる事、札幌市の上空、嘗て見ざる聞かざるものと思ふ可し。

本科マンそろそろ講義が終わりだし、夏休み風を吹出させ予科ボーイをうらやましがらせる事、罪だ、罪だ。

大島君ニューフクを着す。舎の夜は静かだ。水産は試験たけなは。

増井君、秋葉君がんばれッ！ 桜林君既に休みを得て実にノホンぶり。

六月二十五日（土曜日） 中央講堂にて前総長佐藤男爵の胸像除幕式行はる。

土曜の夜、水産の試験も一段落をつげたべる事、たべる事。

夕刻より雲行危しとにらめるに果たせるかな夜に入りて大粒の雨……。遂に救ひの雨が落ちたのだ。喜べ、僕等は明日から五条通りの埃から開放されるぞ。六月二十六日（日曜日） 終日、雲低迷して雨気をはらむ、午後に入りて再び降る。梅雨なき北海道にて、この入梅模様の雨はまた実に感じの出るものである。この日、グラウンドにては、対東北大野球戦、札幌市民陸上競技、対早大ホッケー、ラグビー等スポーツの花乱れ飛び散り、さながらスポーツデーの観あり。

恐ろしく季節はづれのした寒さである。

雨がふると出かける人がある。其名はミスターチェリー。

六月二十七日（月曜日） 珍しく雷が鳴る。

夕刻、カラットあがる。水産、予科ボーイに対して遠慮するの念から本科マン夜は舎に止まるもの少なし。この時に乗じて諸兄大いに能率を増進せしめよ。

東京本郷の富永とか云ふ洋服屋が注文とりに来て、これを撃退し得ず大島君、藤田一君大いに悩まさる。

シヤム国に軍部を中心とせる革命起るとの報有り。

新聞紙上はオリンピック□のニュースに余念がない。スポーツダムニッポンである。

六月二十八日（火曜日） めぐみの雨ですっかり清浄された空気に終日きらきら輝く日の光、かくの如き日こそ日影も、日なたも共に盧生が夢を結ぶ所なれ。

アカシアの花咲きつくして既に路傍にひらひらと落ちゆく景。

畑君、遂に帰省のトップを切り、晩の急行にて札幌を立つ。

六月二十九日（水曜日） 増井君、大島君の間に朝の首しめる事件しきり。何れも朝起きしたいがための奨励、この種の競技、ほむべき又廃す可きか？

水産、本日を以て試験終る。二十周年の紀年をひかへ断然鼻いきくし。

最近、何と世に俗悪なる心中事件の大き事よ。

客観的状況にあつて人、己の生活、過程を批判して見給へ、そこに何等か補ふ可きよりよきものが潜んで居るだらう。これを為し得ざる人は不幸中の不幸、それこそ人生の敗 惨者に等しいぞ。

支那と日本及び列強の間にはさまって大連の海關の事件ますます国際間に紛糾しつつあり。

六月三十日（木曜日） 朝何事か、喧嘩ならんと起き出づれば桜林君を況〔教カ〕師に朝の苺と……。

げに然る有らんと、一同チェリーの朝おきを讃ふ。

札幌のイチゴは今がシオドキである。百匁、五銭～十銭。

大岩君、帰る、帰ると、実になさけない男ぶりである事よ。

七月一日（金曜日） 競馬だ。せつかく納まった埃がまたまた自動車ではりかへされて悩みがぶりかへされた。

第七師団北支派遣の部隊午後二時札幌通過、月寒聯隊も之に加はり万歳の声市中をゆるがすほどなりき。

北海道に於けるこの度の北支、満州事変に対する一般的認識が出征、出征の声に遂に来る可きところ迄来たんだ。

夜、新帰朝の藤原義江の放送あり。断然腕をあげて来た様だ。

七月二日（土曜日） 朝まだき、犬の吠声のため一同苦しめられる。

七月三日（日曜日） 雨がふればよいな一、と思へば果せるかな僕等は埃からすくはれた。それにもかかはらず競馬は人出に増減なしと云ふから大したものである。

予科ボーイもいよいよ明日から第一学期試験

食事部の事務は桜林君臨時に引とり、天辰君、一君がんばる。

佐々木君、金森君の「ヨー、ガンバレ」と互に部屋に至り激励する真情、無上にたのものし。 広瀬君、朝見学旅行を兼ね帰省さる。

七月四日（月曜日） 山根君、朝、支笏湖を経て苫小牧、室ラン、夕張方面に見学旅行に立つ。大岩君、朝の急行にて直に帰省。これで舎の中は一段と静りかへり本心に立もどった、との評あり。

水産諸君、俺等の試験の時より優待だと腕をなする事、なする事。

七月五日（火曜日） 諸君、今夜は能率をあげて頑張ってる様子。

七月六日（水曜日） 大島、連日製図書き。増井君、秋葉君忍路行き（夕方）。

本間君、札幌はせまいと、目下ひたすら慨嘆中。

七月七日（木曜日） 康君、朝九時迄、悠々と床の中にあるのには驚く。

試験に対する緊張の程度が多少欠けてはいまいか。

七月八日（金曜日） 予科試ケン一切終り。 対東北大庭球戦シングル行はる。本学敗る。 山根君見学旅行より帰る。

七月九日（土曜日） 残る三人（佐々木、金森、天辰）も今日で終わる。朝からレコードなる。

夕七時より明菓にて本間君司会のもとに留別コンパ開かる。

断然静かなコンパ、 畑、大岩の両大関がいなくもか一同驚く。

金森君、八時半の列車にて即席帰省。けだし予科ボーイのトップ。

七月十日（日曜日） 曇後晴

各、やるせなくてのほほんとして居る様子。

日曜で而も競馬は最終日と来て居る。その自動車の物凄さ、言語に絶す。

正午、小樽に第二艦隊入港したる為か、二時頃幌都上空に水上飛行の計十機の編隊飛行、堂々空を圧して、幌人を唾然たらしむ。何れも航空母艦能登呂のものであるとの事だ。 九時頃大島君の巣立を見送るべく出発。ステーションはエッター師の帰国見送りの為か 予科の教師達に沢山出会う。

大島君軽便マクラを点検してとても愉快そうだった。

宮部先生に見送られて大島君の果報者は新角第一回の帰省にあの特有のカバンを下げて！！ 御機嫌よう。

若松君、永井君、夫に桜林君、大雪登山を決行すべく買物に出かけたが、意外、帰って来た彼達悲痛な（は当たらぬ）残念さうな面持で止めたと言ふ。店頭のラヂオの天気予報が天候険悪を報じたのださうだ。残念会を七号でやる。若松君のヤツアタリに藤田一君へキエキして居た。十二時頃はさすがにシーンと静まる。

七月十一日（月曜日） 朝から風 天候良好

此の日、藤田両君、若松君小樽へ田舎者の軍艦見物を決めこむ。

永井君、朝から帰省の仕度に急がしい。

晩の急行にて永井君帰省さる。

七月十二日（火曜日） 曇ったり晴れたり

朝、藤田一君、佐々木君帰省さる。

舎は全くしーんと静かだ。山根君、八時で帰省さる。

夜、若松、桜林両君 “ 自由を我等に ” に行く。

七月十三日（水曜日） 曇ったり晴れたり 昨夜猛烈降つたらしい

午後皆町へ出る。一体、今日誰々が残って居るかしらべて見やう。次に姓名を書いて 見る。

本間君 毎日研究材料の最終やお勉強でいそがしい。

桜林君 相変わらず t 読書とお寝坊。

若松君 今日彼は彼氏帰り仕度で忙しそう。

藤田康君 彼は旅行に晩の十時十五分発ってしまった。

天辰君 言はないほうがよさそうだ。

七月十四日（木曜日） 今朝おきたとき若松君はもう居なかった。

一日中舎は閑々として居る。

皆居ない。静かだ。

七月十五日（金曜日）

八月二十七日 朝曇 後晴

朝十時、干城氏帰舎す。元気一杯だ。

此日、本間君 藻岩に出かける。

さすがに夜は ネズミの足音が聞こえてさびしい。夜は寒いくらいだ。

備考 本間君は本日二十時帰舎。

八月二十八日 快晴 今日、先づ暑いと言ってよい。

夏休みを終えて久し振りに聞くレコードもなつかしい。

本間君と二人切りじゃさすがに寂しいです。

八月二十九日（月曜日） 昨夜からしとしととさびしい雨です。

朝の急行でも、晩の急行でも誰一人帰って来やしない。

八月三十日（火曜日） 曇 時々雨 そしてよるに入って猛烈に降る。

誰か帰って来るかと、首を長くしたまま今日も過ぎてしまった。

佐々木君、ヴァケイションノートに曰く、帰舎予定日二八日なりと。

彼氏予定におくれたは初めての休みにて無理もない、無理もない。

八月三十一日 朝ふったり、止んだり、後天候ややよくなる。

若松君帰舎さる。その元気たるやものすごい。

そして同日夜、若松君と干城君 M・P・に出かける。

そして、彼氏達が帰った時には佐々木君が帰って居た。

九月一日（木曜日） 曇

今朝、金森君帰舎さる。今日より予科ボーイ授業開始。

九月二日 今日は相変らず降ったり曇ったり。

晩の急行で大島君帰舎さる。

九月三日（土曜日） 降ったり曇ったり、今日はちょいちょい晴間を見せる。

今日こそはと、待って居たが、結局待ちぼうけを食った形。

九月四日（日曜日） 今朝、増井君こっそりと帰舎して知らぬ顔。

朝の中は善かった天候（？）が亦曇り出し降り出す。

九月五日（月曜日） 朝から雨。

秋葉君、朝帰り、亦すぐ増井君と二人で忍路へ実習に出かける。彼等、六日より十一日迄欠食（秋葉君食事なし）。

夜七時半、桜林君と一君を出迎ふべく本間君を除いた他の面々雨の中を駅に行く。先づ桜林君が黒くなって片手にスーツケース、片手には例のポータブルを下げた現れる。一君が見えぬ。皆がっかりした。聞けば急に熱を出しちゃったんだそうだ。

増井君、秋葉君が居なくなってさびしくなるなあと思って居たのに元気一杯の桜林君が帰って亦明日から賑やかな事だろう。

九月六日 連日の雨降りの続きが未だ止みそうもない。憂鬱な日を部屋の中で過ごしている。総ての人は退屈しきっている。夜雨の中を天辰君は何処へ行ったやら。舎内はほんとうに静かだ。

本日より今学期委員若松この日記を記す。

九月七日（水曜日） 太陽を仰ぎること一週間、又本日も雨かと早朝の雨に危ぶまれたが晴れたる哉、晴れたる哉。残暑の強著しい。

朝の汽車にて永井君帰舎。午後街へ進出する者多し。

九月八日（木曜日） 朝、広セ、大岩両君帰舎さる。そろそろ賑かになる。

本日、時々細雨あれどもかなり晴れた。日増天気よくならん。

夜、広セ君の部屋に皆集って会談す。

九月九日（金曜日） 又雨降りだ。岩見沢地方大洪水と云ふ。又この雨じゃ大変なことにならねばよいが。本日は、誰も帰舎しない。

雨の中を金森、佐々木の両君停車場まで行った。

夜、大島くんの部屋で駄弁る声聞ゆること夜深し。

九月十日（土曜日） 早朝より大雨。時々晴れる。

夜、大島君、藤原義江独唱会に行き、他の人も各々町に出づ。

桜林君、シンフォニー イスパニオール二枚買って妙なるフィリイオーネの音に心酔する。大岩、天辰両君 M・P に出掛け、帰ってから夜遅く迄親談〔ママ〕しておる。兄弟集まって何を為すやら。

九月十一日（日曜日） 朝、天気晴朗なれど午后曇る。七時半の朝急行で山根君、藤田康君帰舎さる。午後秋葉君（欠食）、夜、桜井君忍路より帰る。夜、出掛ける人多し。

九月十二日（月曜日） 本科及び水産、本日よりいよいよ第二学期始業

夜の汽車で藤田一君青白く帰って来る。一きわ賑やかなり。

雨しとしとと降って来る。いつになったら止むことやら。

九月十三日（火曜日） 朝、畑君帰舎さる。雨しとしとと降る

午後晴れたれど、夜に入りて物凄き豪雨を見たり。

午後六時頃、畑君、広セ君、藤田一君宮部先生を訪る。長い湿気の為め本日より任意火鉢を出すことにした。

九月十四日（水曜日） 朝、晴る。風強し、時々 showey (shower カ) を見る。

全部揃ったので夕食卓も本格的賑ひを見せる。

夜、二三の舎生外出す。夕方より晴れなり。

九月十五日（木曜日） 一日中晴勝ちの曇りだったが夕方非常に美しい夕焼けをした。深紅の空を背景とした手稲の山、ポプラの梢、これが連日猛勢を振った自然の姿と思はれぬ位、その薄れ行く紫色と共に街の灯は煌々と輝き出してそぞろに人の心をそそる。仲秋の明月はでざれど今夜は正しくお月見旧暦八月十五日なり。舎生の殆どは外出す。只、ミにあわれを残すは気の毒にも藤田一君風邪にて臥床せることとなり。

本日、日本 正式に満州国承認す。

九月十六日（金曜日） 天気俄然好転。連日の陰ウツさにくさった連中のぼくはつするエネルギーの沸騰、紺碧の空よ、祝福されてあれ。

舎のテニスコート荒廃せるにより掘返しブロードジャンプに用ふる人現る。華やかにピンポンの音ひびき初めぬ。

藤田一君、この日に恵まれず、臥床、円座に一脈のさびしさあり。

九月十七日（土曜日） 好晴なり、風なし、されど空に渡る大気自ら冷徹の秋を感じしむ。午前九時四十分より中央大講堂にて十三旅団長林少将の「上海事変について」の講演あり。満州国の意義深き九・一八事件を明日にひかへ、爾後一ケ年、両国の複雑せる関係、及び上海事変回顧を説き来たつて事件の推移を新に刻せしむ。亦、時宜に適せりと

云ふべし。

金森外二三諸君の室換り初まる。

九月十八日（日曜日） 久方振りの天気良好の日曜、学生等よ、若人よ、汝等がかかる日に何をすれば室に閉籠要あるべきか？行けよ戸外へ、秋、清澄の大気を吸ひて青春の血をたぎらせ！！

されば、寄宿舎の面々本日の動静を記せん。

秋葉君カメラデーなりと朝早く円山公園に出掛く。福引目当に、但し、良き結果は得られなかったらしい。藤田康、増井、若松の三君、弁当持ちで藻岩に登る、されど悲しむべし、頂上は既に塵に汚されしとは。而も二時間も足らざる睡眠を取る大島、天辰、金森、佐々木の四君は幌見より又藻岩の方へ突きぬけ散歩をする。

大岩、桜林の二君は吉例により街頭進出、正に三時間に及ぶ。

畑君は其の他の人々と走幅飛跳に一生懸命に世界記録を目ざして。

九月十九日（月曜日） 晴なり。急に冷氣身に沁む秋の風。

〔欄外に・・満州事件突発記念日なり 〕

本日、二十四日月次会開催とのこと発表さる。委員、桜林、増井、金森、佐々木の四君。金森、天辰の両者早くも大掃除を始む。若松君室換も行ふ。

九月二十日（火曜日） 寒い、寒い。秋だ、北海道の秋だ。火鉢にしがみつく。

旭川の旅団満州派遣との報出づ。桜林君、解剖でくさること、くさること。

九月二十一日（水曜日） 天気良好。 大島君、風邪にて一日中臥す。藤田一君大部良好、舎生よ戒心すべし。恐ろしき風邪の神を防げ。而るが故か、永井君午後一人にて宿舎グラウンドで身を練へる。

九月二十二日（木曜日） 曇り 大島君等が臥床、而して永井君又々一人練る。

一君大部良い。

夜、七、八、九月分の決算を行ふ。七、八月分一日の食費七十七銭となり、その高価に一同驚愕措く能はず。副舎長の英断により五十銭に、九月分も同様六十七銭を六十銭切下とする。平価切下以上の大英断、舎生の中にはやっと胸否財布の紐をなで下ろした人も多々あらん？

九月二十三日 秋季皇霊祭 金曜日 お空は晴天、心気爽快なり、休みと思へば藤田一君も大島君も起上り、床払をする、寄宿舎も風邪の神を追出して朗らかだ。

朝、記念祭各部の発表あり。左の如し。

総務部 畑副舎長

庶務接待部 本間、天辰、金森

装飾部 広セ、山根、藤田康、金森

余興部 大岩、桜林、若松、永井、増井

饗応部 大島、藤田一、秋葉、佐々木

(敬称略)

永井、藤田康、天辰、若松の四君この日 盤溪山に登る。

永井君の足駄登行は万人の驚嘆する所、 康君幌見峠にてポータブルラヂオのテストを行ひ好成績を得る。

九月二十四日（土曜日） 晴 この日七号室の大掃除を行ふ。一号も。

第二学期最初の月次会を行ふ。晚餐後七時より宮部先生、亀井先輩をお迎して、月次会を開く。

畑君、本間君、広セ君各休暇中の旅行経験談を訓話する。大島はファンタジーと徳性、桜林君はアンゲンジンの本性及びその実行(?)について、康君は場つなぎ、藤田一君の感想、舎生の演説盛大なるものありき。亀井氏は休暇中の計画のできなかつたことをお話しになり、最後に宮部先生は寄宿舎財団法人になる由因と、先生の御研究 昆布の分布につきての興味深いお話しあり。その、猶、意気青年を圧するの有様を慶びたい。散会したのは十一時であった。

本日、日米第三号いよいよアメリカに向って飛出した。

九月二十五日（日曜日） 晴、時々雨 特別室及び八号室大掃除を為す。

午後、街へ出掛ける者多し。

日米号、行衛不明。

九月二十六日（月曜日） 雨後晴 第〇師団の〇〇旅団満州派遣となりて〇〇市を出発す。この日雨なれどこれを送らんと鉄道沿線は人の山、旗の渦であった。さあれ国家の干城よ、一時の感激を後に定めなき運命の神に導かれんとは。 国際連盟総会開る。満州問題は十一月に延期論議となる。

副舎長より、在舎記念メダル図案募集出ず。

九月二十七日（火曜日） 曇時々雨後晴

藤田康君風邪気味にて早く臥床す。桜林君も今宵は出でず、blank埋めに大童、秋蘭けて知る淋しさや、空欄帳。

九月二十八日（水曜日） 晴天 藤田康くん本日一日床を出でず。

予科、実専二年は札幌市内中等学校野外演習に参加し、午後、天辰、増井、秋葉の三君のびて帰る。明日も又演習等の由。

夜、日本基督教会主催の水害義捐の音楽会に行く人有之。

満州国最初の駐日代表鮑氏いよいよ入京す。

九月二十九日（木曜日） 雨降るかと思はれたが、幸ひに降らなかつた。予科、実専の二年生今日も演習、相当へばってもよい頃だ。

明日より文武会デーなので皆の気分がのんびりしている。

[欄外に・・・世界思想 第六十八回配本サル]

九月三十日（金曜日） 本日より文武会デーにしてのびられるかと思へば愉快だ。而し雨午后に至りて降り出して本当に泣きたい天気だったので外出する人も少なかつたが夕方晴れ上り、散歩の誘惑を感じさせる。舎生にて軟式野球、庭球大会に出て活躍する者

多し。 楓林、原稿募集。

本日夜、文武会デー講演の為め永井君の父君永井潜氏来札、来舎せられ、夜 中央講堂にて堂々三時間半にわたる「人生の建て直し」の下に多大の教訓、感銘を聴衆に与へし 御講演をなされた。

〔欄外に・・・本日左記図書寄贈アリタリ。土井氏ヨリ 山家集 哲学概論 畑君ヨリ 独逸新聞の研究 ハウラー童話 〕

十月一日（土曜日） 天気だ、休みの天気。 桜林くんも割合早い。

予科三年の四人連れ、小別澤方面へ出掛けたが小別沢村人気の悪いのに驚き忿慨して帰る。而して伝書鳩二羽試験飛行に成功す。畑、広セ、桜林、増井の四君幌見の方に散歩の由。 山根くん庭球で決勝にて敗れし由、残念。

夜、札幌プレクトラムの公開演奏に舎より広セ、大岩の二君出場、多大の成功をおさむ。聴衆も多々ありたる由。

東京市、本日を以て近隣町村を併せ人口五百三十一万、世界第二の大都市となる。ここに舎生中、畑、大岩、大島、藤田両、永井六君は大東京市民となり五百三十一万人の末 席を汚すこととなりしは誠に慶賀に堪えざる所なり。

本日、大逆犯人李奉昌、死刑の判決さる。

十月二日（日曜日） 午前中晴天なれど午后に至りて曇る。山口に出掛ける。

人もなし。家に口込む。

十月三日（月曜日） 天気良好。 舎内変わりなし。 大学グラウンドに於て全道女子陸上競技大会開かる。

リットン卿報告書発表さる。別紙の如し。 日本の不満ゴウゴウたり。

十月四日（火曜日） 雨 予科、実専三年目野外演習の所雨の為に延期になる。

半沢教授の御母上死去とて本間、大岩両君大童。

十月五日（水曜日） 午前晴天なれど午後一天俄にかきくもり降雹を見る。大なるもの直径一・三～四寸に及ぶ。 予科、実専三年目野外演習に出掛け雨にぬれて、へトへト に帰る。

大岩君の父様札幌にお出でになる。

十月六日 雨後晴れ、予科三年演習あり、へトへトに帰る。

十月七日（金曜日） 予科三年休み、午前晴れしも午后に至りて曇る。

十月八日（土曜日） 本日、寄宿舎秋季旅行忍路行を決行する。午後一時十六分発の列車にどやどやと乗り込んだ同勢、満員の車の中で大いに静闇を保つ。

藤田君、金森君、佐々木君の三君は次の汽車にて後を追ふ。本間、大岩、大島、山根の四君は不参なり。

三時二十分頃蘭島着、道を下って磯辺に出れば広がる白砂に限りをつけた断崖が海深く切立って右は忍路湾の方に、左は余市湾頭のローソク〔岩〕を越えてはるか積丹半島の 方迄日本海特有の地形を呈して居る。正面は潮汇果なき日本海の真直中、波静かなる岸 辺

に憩ひてレコードを聞く若人の水平線を見つむる眼、思ひは、ハタ又何処へか飛ぶ！！

三時半、渚づたひに一行進み初む。砂が尽きて道は上り坂にかかる。峠の遠望や又絶大なり。前方に遙か塩谷近くの海を山の端末に見せる。忍路の村に入れば疲弊せる村の全ボウ一目にして知られ、破れた家屋の間より青白き顔の見らるるのも哀れなり。4時、実験所に着く。早速、数人舟を海に浮べ、広セ、永井、藤田康君の三君の如きはカブト岩付近の水につかる。顔色蒼白たる三君の姿を舟に見てそぞろ寒気を催す。桜林君もたらなくなりたるや一人後からつかっていた。後来の三人を加へて、六時に夕食をなす。得意の牛鍋を上げ、まだ不平をかこつものあり（？）。後、風呂に入り、団欒、遊ギをひ、十二時寝に付く。或るものは床を三枚も敷き、二枚もかけ、ここを限りの安眠所を作る。その最たるもの四枚を敷きし康君なり。灯を消せば空一面の星或ひはまばたき、或ひは窓内にのぞき込み、人々の感傷をそそり、一君一人立ちて窓前に立ちて長時間目を中空の一点に向けて、物思ひにふける。彼の心に宿るは何か？

十月九日（日曜日） 眼を開けばアラ残念や、畜生！！お空は泣いている。下界は雨だ。悲観の声四方に起る。九時にやうやう床を離る。かくて午前中部屋の中でぶらぶら或ひは遊ぎに口〔耽カ〕る。十二時過ぎ雨晴れ晴天と共に日輝き初め、勇躍して舟出す。或るひは泳ぎ、或ひはカブト岩に登り記念撮影をなし午前の鬱念をはらしけれど残念なる口時間少なければ急ぎ帰って昼飯をすまし実験所を出たのは忙しかった。二時二十六分吾等の旅行の終路の汽車は蘭島駅を出発す。空はいよいよ晴れ窓外に映ゆるばかりの海面と本島の奇勝、名残の思ひをたなびかせて汽車は札幌へと進んだ。小樽で乗換、五時半、札幌着、一同元気で帰舎す。

十月十日（月曜日） 曇、時々雨、午後三時半より中央講堂に於て陸上競技部主催の南部忠平選手歓迎会あり。南部氏の講演、朝日の映画等盛んなりき。夜、大岩君、父君を函館におくりて帰舎す。 銀行ギャングとらほる。

十月十一日（火曜日） 曇、 変りなし。

十月十二日（水曜日） 晴、一点雲のない小春日とお天気もどうやら上がったらしい。夜、月光の下、街頭進出の者多し。本科マン試験近し。

十月十三日（木曜日） 本日も良天気、昨日気持ちのよい日だった。

山下太郎氏より五百円財団法人基本金として寄附ありたり。

十月十四日（金曜日） 又々続く良い天気。

今夜、舎生揃って円山にて月見を行ふ。札幌の夜景又壮なる哉。

増井、秋葉両君、洞爺湖へ見合に出掛く、夜の汽車で。

山根君、風邪気味で臥す。

十月十五日（土曜日） 晴天なり。 山根君高熱して下らず、病状依然として良からず。広セ、本間両君瀧乃沢温泉なる新地に出掛く。

〔欄外に・・・十五、十六日 増井、秋葉君欠食〕

十月十六日（日曜日） 天候曇る。夕方より雨になる。

戸外、登山に出掛ける者多し。 畑君、手稻。 桜林、永井、若松、金森の四君奥山角〔三角カ〕を征服して帰る。山根君良からず。増井、秋葉君夜帰る。

十月十七日（月曜日） 神嘗祭 曇、若松も風邪気味にて一日臥す。風邪に患る者多し。各人気を付けたし。山根君良からず。

十月十八日（火曜日） 時々雨、 山根君伝染病の徴候あり。

満州国使節鮑氏入京す。 若松も今日一日臥床。

十月十九日（水曜日） 山根君いよいよ入院す。大学病院チブスの疑濃厚につき隔離室に。舎生全部、身の調子宜しからず。戒心々々。何が原因せるか分らず。大島君試験始る。

〔欄外に・・・大塚憲郷氏より函書 ファブブル科学全集 十二巻 寄贈アリ〕

十月二十日（木曜日） 山根君の父君来札の電報、及び台湾の山根君の叔父さんよりの電報あり。永井君昨夜より臥して立たず、風邪の由なるが大事にならねばといが。

副舎長より記念祭一時中止の達しあり。

佐々木君の家でも病気の人多くある由、気の毒至りなり。

予科桜星会秋季大会開催。

十月二十一日（金曜日） 山根君伝染病なること大学病院より正式市役所つうこくありて舎内大消毒行はる。石炭酸の臭い舎内に満つ。

八ヶ月前の八つ切り事件犯人縛はる。松岡代表いよいよ寿府へ出発す。

元在舎生、現在舎生金森君の兄上金森久和君突然持病の腸閉塞にて手術することとなり金森君外泊す。気の毒の至りなり。

十月二十二日 金森君、本日より暫く欠食の由。

山根君の父君、午前十時の汽車にて来札さる。

夕食後、十月分決算を行ふ。一日四十六銭にて割合安イ、石炭代も今月よりとられるから相当に達すべし。

十月二十三日（日曜日） 朝から天気良好なれど風強し。予科生本日日曜なると云ふに午前十一時より中島公園に於いて国防義会大会に武装して引き出され国防行進なるものを行ひし頃より雨降、帰学の時既に皮膚に達する有様、何の因果か何とそれ軍国の秋よ。三時既に帰舎す。不平満々。夜、ヂンバリストの提琴大演奏会大多数の舎生出掛け失我の境を味って帰る。夜、天気良し。

十月二十四日（月曜日） 予科生、昨日の慰労で休み、康、一、佐々木の諸君茨戸に武装（？）勇ましく出掛けた。本日天気良好ついに雨を見なかった。

十月二十五日（火曜日） 本日、楓林原稿締切なれど応募成績悪し。

副舎長より十一月三日記念祭は記念式のみ挙行の発表あり。故に委員の移動行る。

庶務＝本間、天辰、佐々木（金森）、若松 接待＝大岩、大島、藤田一、増井
装飾＝広セ、桜林、永井、秋葉

東京市電罷業の恐れあり。形勢不穩。

十月二十六日（水曜日） 天気良好、大根洗ひをするもの多し。一人八十本の大根は 相

当重荷だが自分等が喰うと思へば勇みもつかう。

大島君試験全部了ってうれしそうに歌っている。本日、畑君も試験 ありたる由。金森 君本日より帰る。

十月二十七日（木曜日） 本日も天気良し。 一年生（予科）は本日より三日間月寒で泊りながら演習の由。勇ましきことではある。

大学赤化事件の処分発表あり。厳罰主義を採りたるもので甚だ気の毒なる人多からんと推察し、起訴者六名は放校、外大多数は停学一ケ年乃至三ケ年、三ヶ月のものも少々、 謹セキの者七、八名、全部で五十名と云ふ大多数なり。而して彼等一ケ年のものと三ヶ月のものといかなる程思想の差あるか学校当局の無思慮の点も少ないとはしないだらうか。何を標準の罰か、彼等の将来を思はばもっと軽くしてやる方が穏当ではないかと思ふ。

藤田康君本日午後の汽車でお父さんの一回忌に帰省す。

十月二十八日（金曜日） 天気良好。大岩君第二学期の初りの休みで夜八時の汽車で帰省す。弱音をはいたあげく。

〔欄外に・・・金森、佐々木両君二日欠食〕

十月二十九日 午後装飾部委員会、食堂天井の貼りかへを行ふ。大根洗ひに多勢急がし。一年生、月寒より帰る。

十月三十日 稀に見る良天気。 大島大掃除を行ふ。本日、予科対高商のラグビー試合小樽で行はれ、予科生大挙しておしかく。永井、天辰両君出掛けた。十九対九にて予科 大勝す。舎生、午後街頭及び郊外に進出する者多し。 夜、舎内静か。

〔欄外に・・・天辰君欠食 永井君、欠食〕

十月三十一日 十月最後の日、予科は第一時限休み

の汽車で見学旅行に。永井君夜遅く

十一月一日（火曜日） やはり十一月の声を聞くと寒い。砥石、三段、手稲をかけて真白だ。たまらなくなつて、本日よりいよいよストーブをたく。心地よし。

北五条線開通、札幌に唯一の坂が出来てたのもし。

〔欄外に・・・本日、楓林発行す。〕

十一月二日（水曜日） 天気良好。ぼかぼかと小春日和だ。記念祭を明日にひかへて何となく心忙し、夜、装飾部大童になって舎内の美化に努める。

夜遅く大島君帰舎。風邪を引いたと、お気の毒。

十一月三日（木曜日） 例年の記念祭に似ず天気良好也。天も我等と慶を共にするか。午前中全員総動員で立ちまわる。今年は病気の人とか、帰省の人とかの都合で式のみ挙 行するので心楽な気持、午後3時より（2時半の予定の所）先生、鈴木氏、亀井氏、多 勢氏、野付牛の北村氏令息をお迎へして式を挙ぐ。順序差の左の如し。

一、開会の辞 藤田一君

一、記念祭歌合唱 本年は公募余り遅き為め一昨年の上井君のを採用す。

- 一、副舎長挨拶
- 一、舎生祝辞 広瀬、天辰二君の祝辞あり。
- 一、先輩祝辞 亀井氏御一人の祝辞あり。
- 一、舎長訓辞 舎創立当時より現代迄の歴史を述べられた。
(祝電披露) 祝電 奥田氏、名古屋土井氏、台ワン佐藤氏
- 一、青年寄宿舍万歳 舎長の発声にて
- 一、舎長万歳 副舎長の発声にて
- 一、閉会の辞 本間君

ついで記念写真を撮影して茶菓饗応ありて五時散会す。

六時より舎生、芳菊にて支那料理に腹の記念祭を行へども女臭紛々として余り気分宜しからず。もっと静かな女気の少ない所がよかったのではなかったか。吾等の出掛けし後、前川氏、時田氏来訪あり。前川氏は時間を間違へしと、時田氏は庶務委員の失体にて案内状受け取らなかつたとは甚だ申訳なし。以後気をつけよ。

十一月四日(金曜日) 予科三年、二年演習。本年の演習の余りに多いに驚く。

夜、二号室にて残物にてコンパを行ふ。大塚君も来りて会談す。

十一月五日(土曜日) 天気良好。今年の暖さ、雪をうたがう。午後椅子をかへし、図書など後片付けをする。

十一月六日(日曜日) 風速し。街中塵埃の渦巻き、されどされど立庁高女の音楽会なれば殆ど全者生公会堂に見物参上、残れる者のみ哀れか。夜に入り風増々つのりストーブの逆流激し。夜中雨となる。

十一月七日(月曜日) 雨降り。大岩君朝の汽車で帰舎す。

十一月八日(火曜日) 札幌にもいよいよ冬が顔見世をする。朝起きると一面銀と黒との交錯だ。寒いがたのしい。連山は装ひ美しくデビューする。

本日、アメリカに於ては大統領選挙行はる。ヤンキーの騒、大変なものだらう。フーバアカルーズヴェルトか。

右翼の大御所頭山満氏の三男某氏、右翼弾圧の手にて召喚さる。夜に至りても雪がちらちらやっている。

十一月九日(水曜日) 天気良し。雪殆ど無い。連山の日映えたる白美はスイスを想ひ出させる。

アメリカ大統領選挙ルーズヴェルト氏大勝利を得た。十三年振りの共和党の天下、いかなる政策に出るや。

十一月十日(木曜日) 康君、朝の汽車で帰舎す。舎も又賑になるらん。

予科の軍事教練査閲行はる。第三学年の終わったのは午後四時半頃、成績余り芳しからず、寒さは寒し、不規則な行為ありて近藤中佐かんかんに怒る。

大岩君、桜林君久振りに音楽練習に出掛く。大島は大童にコーラス部指導とか。

十一月十一日(金曜日) 予科、突然休校となる。昨日のつかれの為か。

実専、本科は本日査閲なり。天気朗らかにして暖い日だ。

桜林君の寝坊は本格に入り午後二時に及ぶ。

十一月十二日（土曜日） 雨 札幌の雪全部消えて後に残るは泥土のみ。

夜、雨を冒して大岩、本間、永井、若松の諸君札幌シムホニー公開演奏会へ公会堂へ行く。

特別大演習、阪、奈良方面で行はる。天皇、昨日より西下遊ばさる。

十一月十三日（日曜日） 午前曇りなれど午後晴れたり。寝坊の者相変わらず有之。 午後殆ど総ての人が町に出掛く。庶務委員、夜亀井氏の所へ写真参上す。舎内変なし。 金森君の兄上昨日退院とのこと目出度し。

十一月十四日（月曜日） かなり寒い。夜、小雨になる。桜林君相変わらず遅し。

夜、大岩、桜林両君音楽練習に出掛け、舎内いと静かなり。

予科生いよいよ試験勉強を初めたらしい。

十一月十五日（火曜日） 小雨、舎内静かなり。東京、神奈川地方大暴風雨にて被害甚だしき様子。

札幌の三越より飛び下り人表れたり。とうとう札幌にもやって来た流行は札幌の生徒によって行はれたと。

夜に入りて風激しく雨加ふ。大暴風雨にならねばよいが、大岩、大島両君にてMPと洒落る。

十一月十六日（水曜日） 昼、変りなし。夜に入りて降雪粉々、四海を埋め、午後十時頃、既に一、二寸になる。スキーヤーの心おどる。桜林君遅く雪をめでんと出掛く。

十一月十七日（木曜日） 雪、雪、雪だ。既に一尺になんなんとするも未だやまず、午前中降りしきり一尺二寸になる。而して暖気激しき故□□よりとけるこそ惜しけれ。か かる十一月中に降雪として大量なるは珍しとのことなり。

午後、永井、藤田康、天辰の三君藻岩へスキーに出掛く。後に残れる者の心や如何許りなるらん。

桜林君も本日七時に起く。これも雪の為せる業？

十一月十八日（金曜日） 天気良好。雪はどんどんとける。道は益々悪くなる一方、北五条の道は通行不可能の程なり。

そろそろ皆の気持引きしまって試験勉強にとりかかるらし。

水産生明日化学の試験とていそがし。

十一月十九日（土曜日） 本日、東京リーグ最後の組合せ、天下の早慶野球第一戦行はる。早大必勝の意気凄く1対0で快勝す。

夜、舎生、鈴木清太郎塾公開演奏会丸井記念会館へ出掛ける者大多数あり。寄宿舍隣の伊藤亀太郎氏令孫も出演される由。

十一月廿日（日曜日） 本日早慶二回戦2対1で早大ストレートを勝を征す。

されば寄宿舍にて早慶の勝負に賭をなして早大二人、慶大五人、結局五人負けとなりて

その金を集めてコンパを行ふ。

大岩、大島の両君文武会音楽部公開演奏会近きて大変忙しい様子、本日（二十一日）午前二時に帰舎せりと。

十一月廿一日（月曜日） 本日よりいよいよ世界殊に日本注目の的たる国際聯盟理事会開かる。松岡代表いかなる論舌を振ふや、日本運命の分るゝ時、緊張せざるを得ない。今日の処舎内変わりなし、音楽部の連中練習の為忙しい。

十一月廿二日（火曜日） 松岡代表の演説影響良好なる由、今後の事態而して気になる。夕食後十一月分決算を行ふ。一日五十銭、かなり高し。

音楽部の人毎日の様に練習だ。

十一月廿三日（水曜日） 新嘗祭で休み明日の演奏会をひかへて昼大島君、夜管弦楽の人と練習に出掛く。夜も外出する者多し。

十一月廿四日（木曜日） 暖気は十月の如し、北五条の道悪しきこと天下一品。

夜、公会堂で文武会音楽部十九回公開演奏会ありき。舎よりコーラス大島君、オーケストラ大岩君、マンドリン部広瀬君の三人出場す。プログラム別紙の通り、桜林君はどうしたのか出なかった。家に一人引っ込んでいたらしい。

十一月廿五日（金曜日） 本当に暖かかった、何か変調がなければよいが。夜、本間君伊藤さんからの菓子のお送物を七号で開いて御馳走になる。水産二年生又化学試験明日行はれるので忙しい。広瀬君も明日試験の由。

十一月廿六日（土曜日） 昨夜から雨、いよいよ寒くなって来た。

午後一時廿五分頃突然家がぐらぐらと今迄にない大きい地震に見舞れた。寄宿舎がつぶれないかと心配した。

午後大岩君、大島君、桜林君の街頭騎士は威風堂々、三越方面へ出発す。夜ちらちらと雪が顔の白粉を落とした程。

十一月廿七日（日曜日） 朝は皆遅い、午後街頭進出のする者例の如し。

夜、今学期最後の月次会十二月三日に行ふとの掲示あり、委員、広瀬、大島、永井、若松の四君。

十一月廿八日（月曜日） 又、雪がやって来た。二、三寸積もって心をおどらせる。

朝の汽車で大島君のお祖父さんが独立教会五十周年で来札、大島君、小樽迄迎へに出らる。

午後、永井、天辰の両君藻岩山へ。天気の良い事。而し、雪が少なかったと悲観していた。

十一月廿九日（火曜日） 降った、積もった一尺許の雪が、どかりと札幌を包んだ。

午後、桜林、若松の二氏藻岩の最初の頂上をさる。永井、大岩、藤田君は途中迄、増井君一人憂鬱になっている。

十一月卅日（水曜日） 今日少し積もっている。大岩君今日もスキーを持って円山へ行く。どうも今年は大雪が降るらしい。夜、公会堂へスキーの映画を鑑賞に出かけそのイ

ンチキに恥をかいた面々あれど其の人の名誉に関する故名は特に秘す。

十二月一日（木曜日） 街はべしよべしよになって来た。康君、一人藻岩征服して帰る。頑張れ、頑張れ。夜、委員買い出しに出る。

十二月二日（金曜日） 吹雪 午前、中央講堂に於いて大島君のお祖父さんの大島正健氏の特別講演あり。予科生全出席。

午後、委員、買い出しに出掛けるや突然大吹雪街を吹きまくり瞬時にして雪風の中に札幌は没した。積もる粉雪、夜に至って雪やむ。されど既に五、六寸新雪積もり寄宿生スロープにて夕食後多数の舎生興ず。

広瀬君本日試験一つ終り、友達集まって麻雀にいそしむ。

夜、大島正健氏の基督青年会の御演説ある由。広瀬、大島君出掛く。

聯盟では十九ヶ国委員会に移されたがあっけがない。

十二月三日（土曜日） 昨夜は猛烈に寒かった。本日、月次会なれば午後、委員御馳走に多忙。他の人は委員を後目にスキーへと。あゝ無情なる哉。

五時半、晚餐開始、美味天下一品、皆腹をへらしてがつつく事。

月次会は七時より、宮部先生、大島正健氏、時田先輩をお迎へして始まる。

広瀬君の開会の辞、副舎長の挨拶、康君、佐々木、安井、金森の四氏の簡話あり。時田さんの大学とは深く考えることを学ぶ所だ、と云ふお話しあり。次に舎長の大島正健氏 紹介あり、最後に大島君のお祖父さんは非常に興味深く御老齢にも拘わらず同輩のなされた偉業、第一期生の生活振り等を約一時間にわたってお話しあり、まだまだつきない有様であった。

茶菓に移っても又クラーク氏の南北戦争従軍記、島松の別離のあの「ボーイズビーアンビシャス」の一幕を手振り身振りでお話しになり、又クラーク氏の修身は生きた自分の経験であり、それがよく頭に残っていると、故に生きた修身は最もよいとクラーク氏の開校演説の最初の一齣を暗誦された等我々の最も興味を有する所を縷々として語られいつつきるとも思はれない有様であったが余り長くなるので十時半にお帰りになった。かかるクラーク氏の逸事、農学校時代の生活等は現在北大における我々の最も関心の有するものでそれを親しくうかがうを得たのは最も幸福とせねばならない。

月次会終わって委員の改選あり。

会計部 天辰君 次点 本間君、共に四票

食事部 藤田一君 大岩君 八票

文芸部 康君 八票 次点 大島君

運動部 大島君 七票 次点（記入無し）

衛生部 佐々木君 十票 次点 秋葉君

以上

十二月四日（日曜日） 昨日の鬱憤晴しにか永井君、桜林君と遙山に出掛けた。

午後、天辰、秋葉君円山方面へ。

夜、今井記念館にてマンドリン部の演奏会二、三人行った模様。

十二月五日（月曜日） 聯盟に於いてはいよいよ総会に移すことになった。小国側のわめき甚だしきものがあらう。

本日台湾海峡に於て駆逐艦早蕨沈没する由、生存者十二、三名、原因不明との事なり。寄宿舎変りなし。

十二月七日（火曜日） 蘇炳文に対してはいよいよ日本軍は立つことになった、空撃と陸行によりはいよいよ行動開始す。聯盟に於てスペイン、アイルランド等の代表の毒舌はげし。

十二月七日（水曜日） 蘇炳文一たまりもなく露領に敗走す。皇軍興安嶺を越えてハイラルへ。

夜に入りて降雪はげし。予科生試験が近づいて忙し。

十二月八日（木曜日） 降雪、尺に及ばんとす。それぞれスキーの準備に忙しい。梅村君午後、藻岩へ、大島君円山方面へ、而して天辰君は舎スロープにてふるふ。

日本軍万洲里に入城す。監禁中の日本在留民は全部安全に救出されしと。聯盟小国硬派四国決議案を出す。

十二月九日（金曜日） 天辰君、某喫茶店よりクロイツェルソナタを借りてきた。舎生の耳を楽しませ、又彼自身の手腕を示した。 夜、活動に行く者あり。

松岡代表はいよいよ最後的大雄弁を振り満堂を感動さす。

十二月十日（土曜日） いよいよ予科第二学期も本日を以て授業終わる。

試験が近く目の色が変わる諸君。

鉄北線橋も竣功し本日開通す。鉄北は非常に便利になった。

十二月十一日（日曜日） 大島君、朝早く増し無意根へ行く。午後気ばらしに広瀬君と天辰、康、佐々木の三君藻岩へ。途中、帰り頃雨降る。

蘇炳文引渡交渉つかず。夜、大島君かなり疲れて帰る。

十二月十二日（月曜日） 医学部本日で終わりらしい。桜林君明日より登山旅行一週間と忙しい。予科生、水産生最後の頑張り。

十二月十三日（火曜日） 朝早く桜林君無意根より銭函へ横断スキー旅行に一週間許の予定で出掛く。予科生明日より試験で青息吐息。夜はかなり寒い。これが本格的の寒さ だらう。

本日突然露支国交復活す。露西亜の態度近頃全然我々に判らぬ。蘇炳文一行もちがあかない。

十二月十四日（水曜日） いよいよ予科待望の試験の幕は切って落とされた。龍になるか、蛇になるか、だが、皆割合うれし相な所を見ると良いらしい。 水産生も明日より 試験

寄宿舎はいやに静かだ。

聯盟に於ける和協会議も日本は応じないらしい。

十二月十五日（木曜日） 予科試験第二日目、水産第一日目そろそろ調子が乱れてくる。桜林本日夜、突然予定を変更して帰ってくる。何が恋しくなったか、或いは何かの故障か。

十二月拾七日（土曜日） 試験ももう山を越した。明日は日曜なので割合のん気。

本日午前東京白木屋四階より出火、上階に燃え上がり死傷多数の模様、デパートの火災予防もっと注意すべきだ。と共にデパート通勤者（or 皆勤者）にとっても一大脅威の的にならう。

真夜中より六号に移ってコンダクトを有する舎四重奏開かる。

十二月拾八日（日曜日） 予科三年はもう一日だ。桜林君朝里へ登山とて朝出て行く。

世はゴールドラッシュ（黄金狂時代）、三木武吉の五十二億円、片岡弓八、小泉又二郎の海底黄金引揚事業、いずれが真面目なのか分からない。

十二月拾九日（月曜日） 予科三年試験終了。幾分、寄宿舍ものんびりして来た。

夜、坪田氏の所より進太郎君追悼の御菓子御送り下され二号室でコンパを開き頂く。

十二月廿日（火曜日） 予科試験終了す。

十二月廿一日（水曜日） 水産試験終了す。夕方桜林君帰舎す。雨の為め朝里登山目的を果たさず。夜、亀屋支店で留別コンパを行ひ舎全員出席す。後、街頭発展する者多し。増井、康の二君は夜十時の汽車で十勝山岳部合宿に出掛く。

十二月廿二日（木曜日） 佐々木君朝早き汽車で帰省す。誰も知らず。

大岩君、本日帰省の所予定変更にて何時になるか分からぬと。大島、若松、永井三君藻岩へ出掛け、あら残念永井君スキーを折ってしょげかえり帰る。

金森君、夜帰省す。

十二月廿三日（金曜日） 朝九時の汽車で広瀬、桜林の両君青山スキー。今夜、畑、永井、秋葉の三君帰省す。

十二月廿四日（土曜日） 帰る人なし。本間君、欠食。クリスマスイブの御馳走あり。

十二月廿五日（日曜日） 早朝より降雪吹雪。大岩君、朝帰省す。大島、若松、天辰の三君円山方面へスキーに午後出掛く。一君、クリスマスで忙し。夜に至り雪はげし。

十二月廿六日（月曜日） 朝、大島君帰省す。夜、天辰君帰省。

十二月廿八日（水曜日） 本日、本間君欠食。夜、本間君の所へお客あり。

十二月廿九日（木曜日） 夜八時の汽車で康君、増井君帰舎す。広瀬君、桜林君羊蹄へ行ったのが帰らない。十勝の二人へバッテあさましき限りなし。康君折れたスキーを見せびらかす。

疲れた口に十勝を語る、彼等の顔や悲壮なり。

十二月卅日（金曜日） 朝、道庁火事あり。夜十時の汽車で桜林君、広瀬君帰る。黒い顔、餓せる腹、なんと勇ましきか。

康君、夜の急行で帰省す。石沢達夫氏第十二回追悼会行ふ。

十二月卅一日（土曜日） いよいよ一九三二年も終わる。除夜の時計台の鐘聞きつつ電車音騒し。多難なりし昭和七年と、これでその記録は永久に吾人の歴史の一頁に輝く なる

らん年よ。一杯の年越そばと共に六人の淋しき舎生の新たなる年迎ふる心根に最後の 喜
びと悲しみの混合物を与へて幕を閉じたこの年を、恵まれるならん一九三三年への 心
強き試練と甘受しやう。そして一日前へ、一九三三年一月一日へ希望を持って進もう。 最
後の鐘の音と共に、そして最初の鶏鳴と共に。